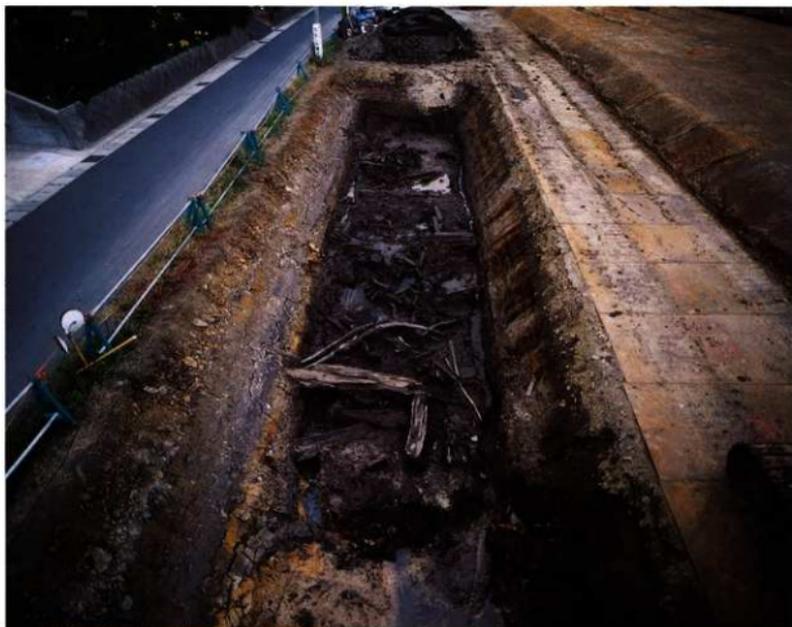


市道春日東生馬線道路改良事業に伴う
法吉遺跡発掘調査報告書



2003年3月

松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

市道春日東生馬線道路改良事業に伴う
法吉遺跡発掘調査報告書

2003年3月

松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

例 言

- 1 本書は平成12年度～13年度にかけて実施した、市道春日東生馬線道路改良事業に先立つ法吉遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は松江市都市建設部土木課から依頼を受けた松江市教育委員会の委託を受けた松江市教育文化振興事業団が、調査員藤原哲を担当者として平成12年11月～13年3月（12年度）、13年9月～14年1月（13年度）に現地調査を、遺物整理は平成14年11月～15年3月（14年度）まで実施した。発掘調査の組織は下記の通りである。

依頼者 松江市都市建設部土木課

主体者 松江市教育委員会

実施者 松江市教育文化振興事業団

調査者

教育長 伊藤忠志（13年3月31日まで）

山本弘正（13年4月1日から）

理事長 松浦正敬

専務理事 米田喜雄（14年3月まで）

田中寿美夫（14年4月から）

事務局長 柳浦孝行（13年3月まで）

吉岡正夫（13年4月から）

調査員 藤原 哲

嘱託員 廣浜貴子（13年3月31日まで）

勝部文生（13年9月～14年1月）

秦 愛子（14年11月から）

- 3 発掘調査及び内業整理については以下の方々の参加・協力を得た。記して感謝する。

朝倉キミ、家熊宏、柿田敬志、福田唯雄、福田すみ子、細川信子、細川勇治、余村昭代、余村年子、余村ナツ子、余村まる子、和田允（50音別・敬称略）

また、平成14年度に参加した奈良文化財研究所の「木製品調査研修」には以下の諸先生から貴重な講義を受けさせていただいた。上原真人先生（京都大学）、飯塚武司先生（(財)東京都生涯学習文化財団）、北浦弘人先生（鳥取県埋蔵文化財センター）、井上和人先生、豊島直博先生（奈文研）、樋上昇先生（(財)愛知県教育サービスセンター）、扇崎山先生（岡山県教育委員会）、高妻洋成先生（奈文研）、河野通明先生（神奈川大学）、山口譲治先生（福岡市教育委員会）、山田昌久先生（東京都立大学）、橋本正博先生（小松市教育委員会）、光谷拓実先生（奈文研）、その他、奈文研の職員の方々には非常に暖かく迎えて頂き、研修生の皆さんにも楽しく接して頂いた。

秋山浩三氏（(財)大阪府文化財センター）、佐伯純也氏（(財)米子市教育文化事業団）には田下駄に関して、中村唯史氏（二瓶自然館）には地質に関して有益な教示を、澤田順弘先生（鳥根大学）には出土石器の鑑定をして頂いた。また、中村亮仁氏（(財)富山県文化振興財団）には自然科学に関する玉稿を頂いた。木製品の樹種同定に関しては株式会社古環境研究所に業務委託を行った。

- 4 本書の執筆・編集は藤原 哲・秦 愛子が行った。

凡 例

- 1 本報告書に記載されている標高はTPを基準としている。
- 2 図中の北は磁北であり、調査位置図・遺跡位置図は座標北である。
- 3 本書の遺構番号は各地区名の後二桁で表示した。遺構・自然流路・自然痕跡に関わらず、調査したものについては通し番号を与え、報告書でもこれを踏襲した。
- 4 遺物実測図は土器1/4、木器・石器1/6とした。
- 5 上師質の土器、石器は白ヌキ、須恵器・陶器類は黒ヌキ、木器は木目を模式的に記入した。
- 6 土色・遺物の色調について土色帳記載のあるものは農林水産省農林水産技術会議事務局監修2000年度版『新版標準土色帳』に拠った。

目 次

例 言
凡 例
目 次

本 文

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	1
第3章 調査の成果	4
1 調査の方法	4
2 基本層序	4
3 A区	5
4 B区	5
5 C区	8
6 F区	8
7 G区	10
8 H区	10
9 I区	12
10 J区	19
第4章 まとめ	28
付論 自然化学分析	
1 法吉遺跡出土の種実遺体（中村亮介）	32
2 法吉遺跡における樹種同定（株式会社 古環境研究所）	35

図表目次

図1 遺跡位置図	2
図2 調査地位置図	3
図3 A区平・断面図	5
図4 A区出土遺物実測図	5
図5 B区出土遺物実測図	5
図6 B区平・断面図	6
図7 C区平・断面図	7
図8 F-01出土遺物実測図	8
図9 F区平・断面図	9

図10	G区出土遺物実測図	10
図11	H区出土遺物実測図	10
図12	G・H区平・断面図	11
図13	I区表盛土～II区耕土出土遺物実測図	12
図14	I区平・断面図	13
図15	I区第1面出土遺物実測図	14
図16	I区包含層(1～2面間)出土遺物実測図1	16
図17	I区包含層(1～2面間)出土遺物実測図2	17
図18	I区第2面出土遺物実測図	18
図19	J区表盛土～1面出土遺物実測図	19
図20	J区平・断面図	20
図21	J区J-01、J-02出土遺物実測図	23
図22	J区包含層(1～2面間)出土遺物実測図	24
図23	J区第2面出土遺物実測図1	25
図24	J区第2面出土遺物実測図2	26
図25	J区第2面出土遺物実測図3	27

表1	法吉遺跡出土の種実遺体一覧表	33
表2	法吉遺跡における樹種同定結果	37
表3	出土遺物観察表	40

写真図版	法吉遺跡出土の種実遺体	34
写真図版	法吉遺跡の木材	38

写真図版1	A区全景	I区第2面検出状況
	B区全景	写真図版5
	B-01自然木堆積	I区木製品(71)出土状況
写真図版2	C区全景	I区木製品(69)出土状況
	F区全景	J区第1面全景
	F-01ドングリ集中地点	写真図版6
写真図版3	G区全景	J-01、02検出状況
	H-1区全景	J区木製品(114、116)出土状況
	H-2区全景	J区第2面検出状況
写真図版4	I区第1面全景	写真図版7
	I区第2面全景	A区・B区・F区出土遺物
		G区・H区出土遺物
		写真図版8
		I区表盛土～II区耕土出土遺物
		同上・銅青土器

I区第1面出土遺物
写真図版9 I区包含層(1~2面間)出土遺物1
写真図版10 II区包含層(1~2面間)出土遺物2
写真図版11 II区包含層(1~2面間)出土遺物3
写真図版12 II区2面出土遺物
J区表盛土~1面出土遺物

写真図版13 J-01、02出土遺物
J区包含層(1~2面間)出土遺物1
写真図版14 J区包含層(1~2面間)出土遺物2
J区2面出土遺物1
写真図版15 J区2面出土遺物2
写真図版16 J区2面出土遺物3

第1章 調査に至る経緯

松江市都市建設部土木課では、市道春日東生馬線道路の拡幅工事を行うことになった。周知の遺跡である法古遺跡の範囲内もこの工事予定地が含まれていたため、松江市教育委員会文化財課では松江市都市建設部土木課との協議に基づき、平成12年度・13年度に現地調査を、14年度に報告書作成事業を実施することになった。

これに基づいて財団法人松江市教育文化振興事業団が松江市教育委員会より事業委託を受け、平成12年11月～13年3月（12年度）、13年9月～14年1月（13年度）に現地調査を、平成14年11月～15年3月（14年度）に遺物整理、及び報告書作成を実施した。

調査にあたっては松江市教育委員会文化財課、同都市建設部土木課、(財)松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課が協議した結果、次の基本方法で調査を行うことになった。各調査区の掘削法面を約40°に設定し掘削を行うが、包含層までは重機で、以下は人力で掘削し、2.5m以下は調査を行わない。これは遺跡地内の地盤が極めて軟弱であり、調査上での安全を確保する必要上から決定したものである。

また、付近住民の便宜（通道確保）及び廃上処理のため調査地内をアルファベット名で区切った幾つかの地点毎に調査を実施することとし、12年度にはA、B、C、F、G、H1、H2区を、13年度にはI、J区の調査を実施した。

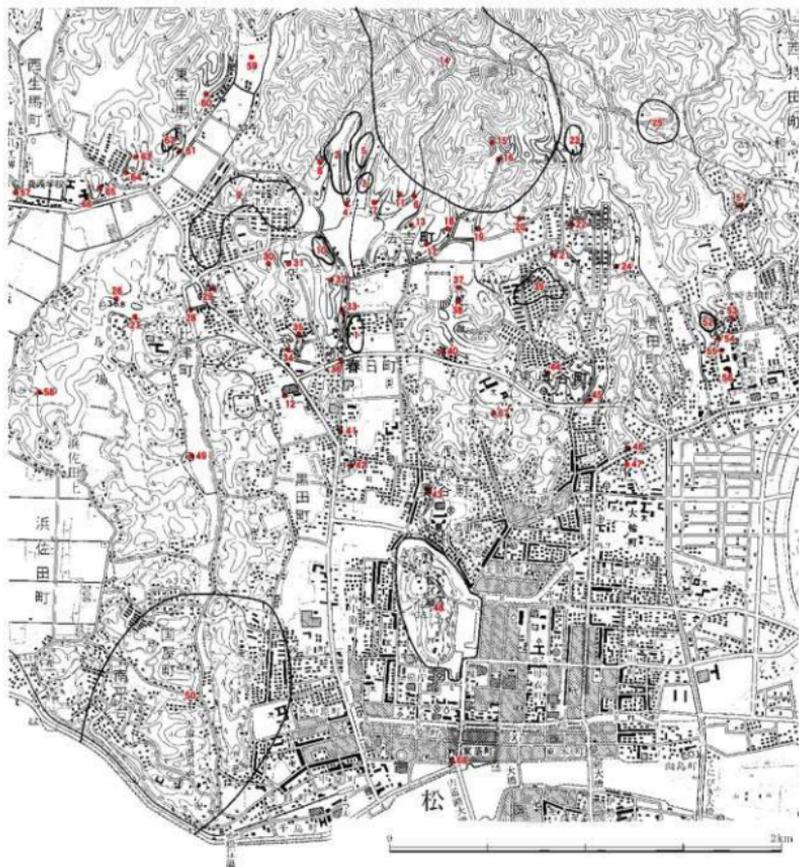
D、E区及び一部の住宅地密集地については住民の安全確保、及び付近調査の結果から調査を行わないことになった。

第2章 位置と環境

調査地が含まれる法古遺跡（1）は島根県松江市法古町、及び春日町に位置する。南側には松江市街地を形成する平野部があり、北に向かって白鹿山まで達する湖北山地に接する立地である。微地形的には西側山裾部から緩斜面で下がる谷部に位置している。松江平野は縄文海進後に形成された沖積平野であるが、調査によっても締まりの緩い軟弱なシルト、及び砂層が堆積しており、谷奥部からの沖積作用によって形成された地形であることが分かる。

周辺では北側の湖北山地側に遺跡が多く、古いものでは後期旧石器が採集された白鹿谷遺跡（23）があり、田中谷遺跡（8）では弥生時代後期の遺物を含む旧河道が検出された。周辺の古墳は極めて多く、月廻古墳（9）、伝字牟比売命御陵古墳（9）、塚山古墳（4）などが知られている。歴史時代においては久米遺跡（31）で獨立柱建物跡が検出されている。塚山古墳は平成11～12年に調査され、六神頭鏡、鉄刀、三角板鋸留短甲等が検出された。また、同古墳は公園の一部として保存整備されている。

『出雲因風上記』によれば「宇武賀比売命、法吉鳥と化りて飛び度り、此処に静まり坐しき。故、法吉と云ふ。」（萩原千鶴訳注 1999）という地名説話を載せているが、この由来となった鶯谷遺跡（6）は遺跡地の北東にあり、現在調査地すぐ傍にある法吉神社の旧社地である。



No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	法吉遺跡	18	山積古墳群	35	久米横穴墓群	52	賀田ヶ丘古墳群
2	田中谷遺跡	19	長谷處徳神古墳	36	中代遺跡	53	宮田古墳群
3	下がり松遺跡	20	森谷荒神古墳	37	栗元古墳	54	小丸山古墳
4	塚山古墳	21	岡田薬師古墳	38	栗元横穴墓	55	菅田丘古墳
5	角谷遺跡	22	二反田古墳	39	折畑古墳群	56	菊畑山古墳
6	鶯谷遺跡	23	白鹿谷遺跡	40	燈籠倉古墳	57	名尾丘古墳
7	新宮古墳	24	藤ヶ崎古墳	41	法吉小学校裏山横穴墓群	58	彌津原山城跡
8	田中谷古墳	25	藤ヶ谷遺跡	42	厚利支天山横穴墓群	59	平野前庭寺
9	月屋古墳群	26	ゴルフ場内古墳群	43	赤山横穴墓群	60	法恩寺瓦窯跡
10	久米古墳群	27	ゴルフ場内横穴墓群	44	ひのきん山横穴墓群	61	桜本古墳
11	松字半加比売命御陵古墳	28	水崎崎横穴墓群	45	桜崎横穴墓	62	桜本古墳群
12	春日遺跡	29	ひやくだ横穴墓	46	切通横穴墓	63	山上古墳
13	古岡兵之助宅前古墳	30	久米第2横穴墓群	47	茅崎横穴墓	64	山王神社跡
14	白鹿山城跡群	31	久米遺跡	48	松江城址	65	井原古墳
15	長谷原跡推定地	32	榑梅古墳群	49	小丸山古墳	66	かいつき山古墳群
16	ココメタカ山遺跡	33	石在塚塚	50	荒鷲城跡	67	万寿寺裏山古墳
17	山藤塚群	34	比津ヶ崎横穴墓群	51	深町古墳群	68	茶岡古墳

図1 遺跡位置図

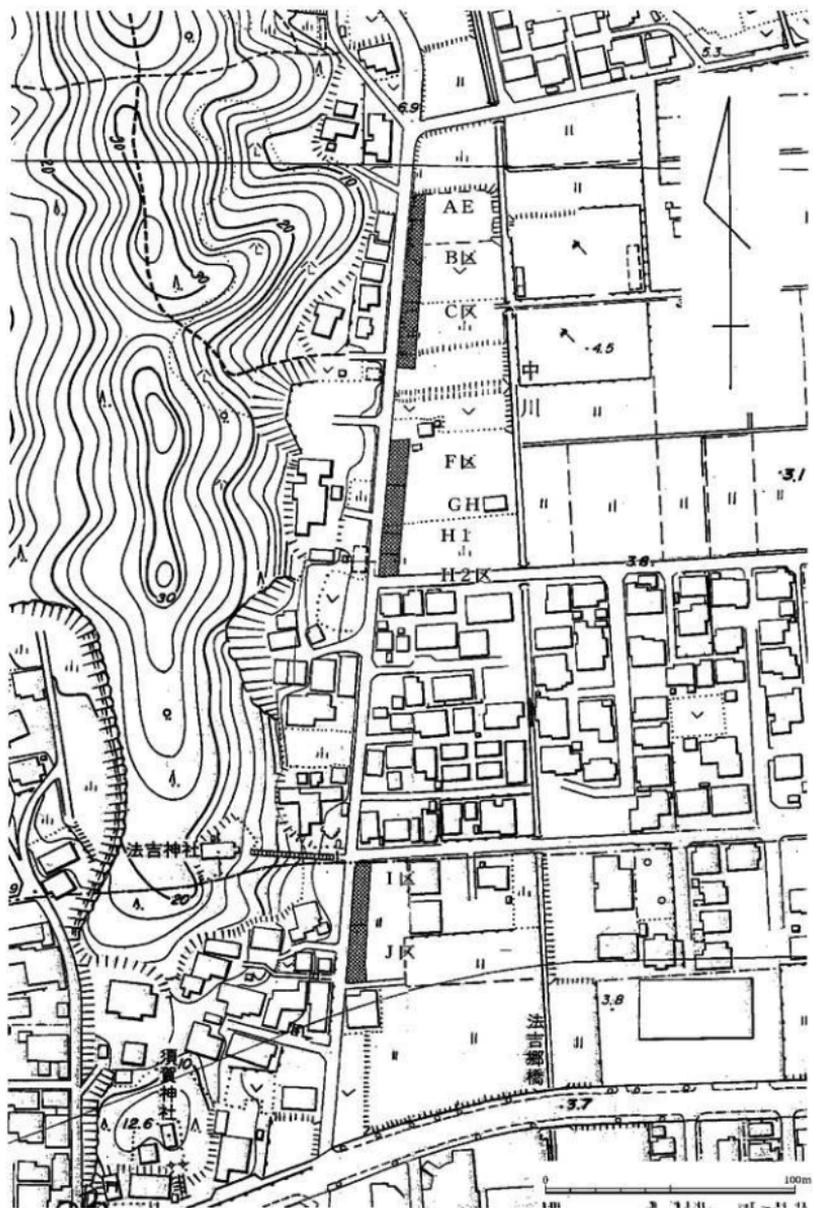


図2 調査位置図

第3章 調査の成果

1 調査の方法

法古遺跡は松江市法古町及び春日町に位置する。調査対象地は市道春日東生馬線の道路拡張部分である。調査にあたっては松江市教育委員会文化財課、同都市建設部土木課、(財)松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課が協議した結果、次の基本方法で調査を行うことになった。

各調査区の法面を約40°に設定し掘削を行うが、包含層までは重機で、以下は人力で掘削し、2.5m以下は調査を行わない。これは遺跡地内の地盤が極めて軟弱であり、調査上での安全を確保する必要上から決定したものである。

また、付近住民の通り道確保、及び廃土処理場確保のためアルファベット名で区切った幾つかの地点毎に調査を実施することとし、12年度にはA、B、C、F、G、H1、H2区を、13年度にはI、J区の調査を実施した。調査対象面積は12年度(880m²)と13年度(438m²)の合計、1318m²である。

D、E区及び一部の住宅地密集地については住民の安全確保、及び付近調査の結果から調査を行わないことになった。

2 基本層序

調査地点の基本層序は以下の通りである。調査地A～C、F区は盛土、及び旧耕土がGL-2mまで続き、その下から砂層、砂礫層が0.5～1mほど続く。その間に層厚約0.4mの有機質を多量に含んだ黒色砂層があり、同層より多量の木片、草葉、堅果類の自然遺体が検出された。砂層の下には黒色・白色の粘土層が厚く堆積していた(GL-2.5m以下)。この黒色粘土層から縄文土器1点が出土しており、地山の検出は出来なかった。しかし、安全を考慮した調査の都合上、この黒色粘土層をB層と称し、仮の地山として調査を終了した。

G、H区では有機質を多量に含んだ黒色砂層は見られず、盛土・旧耕土も浅くなり、砂層の堆積も未発達である。また、G、H区ではB層も層厚0.5mと比較的薄いため、調査終了に際してはB層も掘り下げ、地山の検出に努めた。その結果、黒色粘土層の下から、茶褐色の砂質シルト(GL-2.2m・標高3.8m)が認められた。調査地付近で行われたボーリング結果を参照にすると、これら砂質シルト層が当該地の地山層(松江層)に相当すると考えられる。

これに対し、未調査地区をはさんだI、J区では盛土・旧耕土の下の暗灰色系のシルト(含有機質)から数点の遺物が検出された。

GL-1.5～2.5mでは黒色有機質層や灰色粘土層が堆積する。この包含層では木製品の残存が良好で出土土器も縄文～9世紀前後と幅が広い。GL-2.5m以下は灰色・オレンジ色砂層の堆積が認められた。出土遺物はない。砂層の薄い部分では部分的にオレンジ色シルトの地山層を確認したが(GL-3m以下)、安全面を考慮して全面にわたる地山検出は行わなかった。

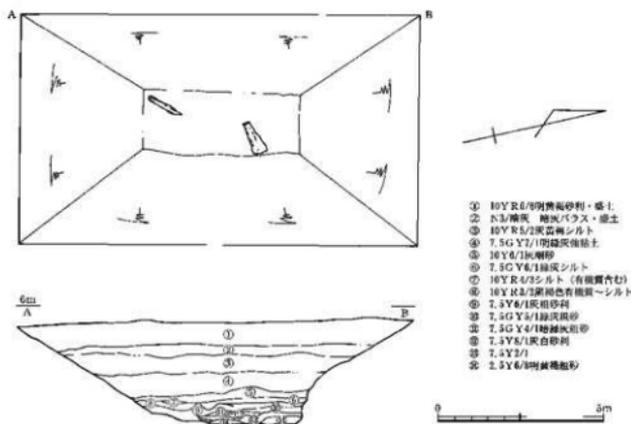


図3 A区平・断面図

3 A区 (第3、4図 写真図版1、7)

A区の範囲は7m×12mであり、調査範囲内では最北地点に位置する。土層の堆積状況は以下のようである。標高5.5m～4.0mまでは表土・盛土及び旧耕土が水平堆積する。次いで0.5mほどの層厚を測る明緑灰の強粘土層が同じく水平堆積し、それより以下は旧河道状の砂層・砂礫層が続く。この砂礫層は灰・緑灰、灰白などの砂礫層に自然木などの有機質が混じるもので、砂と有機質の互層からなり、自然木（流木）や木片、フングリなどの自然遺物が多く検出された。砂層の下は黒色粘土層（B層）が調査区全域に認められた。

調査は砂層まで重機掘削し、砂層を人力掘削でB層まで掘り下げた。砂層は上から掘り下げたものの、厳密な分層は極めて困難であった。B層以下は基本方針に従って掘削を中止した。

調査の結果、明確な遺構は認められず、遺物は砂層内より黒曜石の剥片1点（1）が出土した他は遺物の出土は無かった。

（1）は一部に自然面を残す黒曜石の剥片で、長さ4.8cm、幅3.4cm、厚さ1.1cmを測る。細部にわずかだが小さな剥離面が見られる。

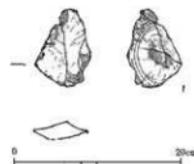


図4 A区出土遺物

4 B区 (図5、6、 図版1、7)

B区は7m×32.5mの調査範囲を測り、A区の南隣、C区の北隣に位置する。

土層の堆積状況は以下のようなも

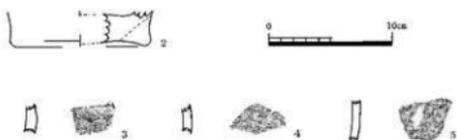


図5 B区出土遺物

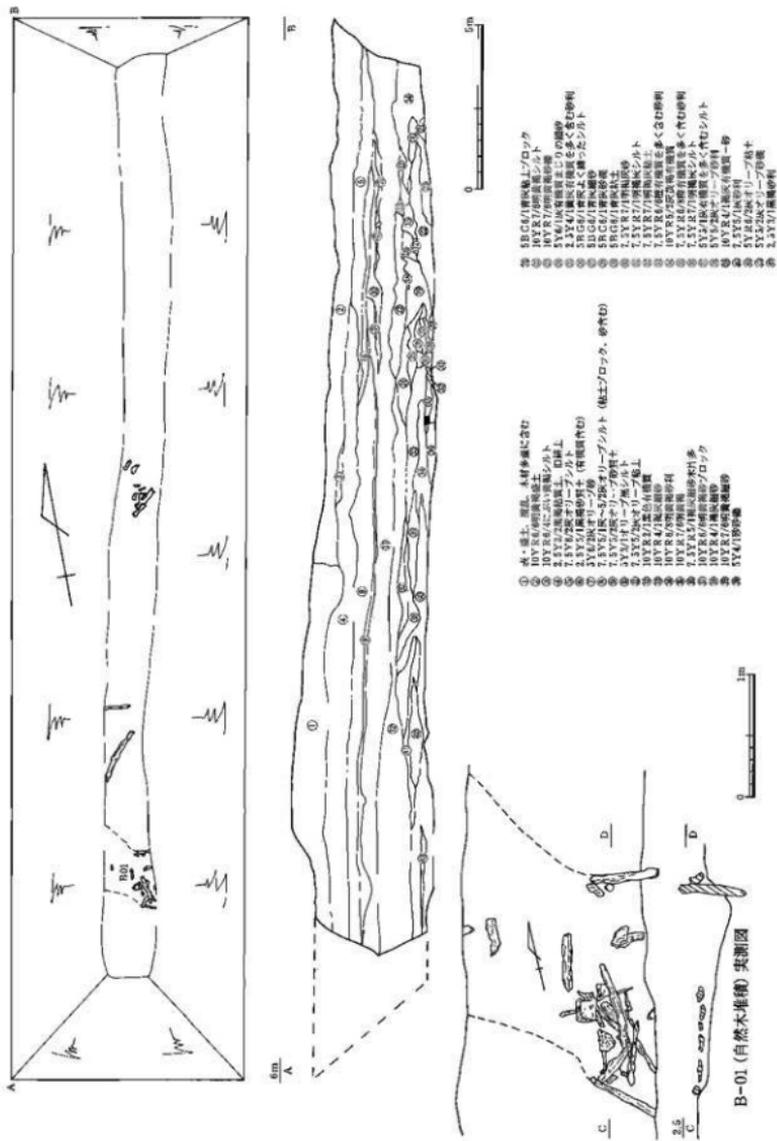


図6 B区平・断面図

のである。バラスを含む盛土・木材等を含む擾乱層などが表土の約1mほど続き、その下に旧耕土、グライ化した粘土層が水平堆積する。それより以下は約0.8mにわたって砂層・砂礫層（含有機質）、黒色粘土層（B層）と続く。

砂層は砂と有機質の互層よりなる。A区と同じく有機質層から自然木や葉片、フングリなどの自然遺体が多く検出された。その下に黒色粘土層（B層）が調査区全般にわたって認められたのはA区と同様である。

調査において調査区南側では自然木の集積が認められた（B-01）。当初、杭状の自然木も認められたため、遺構の可能性を考慮して調査を行ったが、B-01の覆上は黒色粘土層（B層）の凹み部分に洪水？等によって粗砂層が堆積したものであり、人工的な遺物の検出は皆無であった。これらのことから、調査の結果としては自然堆積によるものと判断した。

遺物は人力掘削中に砂層より縄文土器3点（3）～（5）と側溝掘削中に黒色粘土層（B層）より縄文土器底部1点（2）が出土した。

（2）は縄文土器の底部片で、推定底径は11.4cmを測る。胎土は密で、3.0mm以下の砂粒を多く含む。約1/4が残存し、底部から立ち上がる部分がわずかに残る。ローリングを受けており、全体的に調整は不明瞭である。（3）～（5）はいずれも5.0cm未満の縄文土器片で、器種は不明である。2.0mm以下の砂粒を含む。（4）は外面に二枚貝で条痕を施す。その他の調整は、（4）は内面をナデており、他は風化により不明である。

5 C区（第7図・写真図版2）

C区の調査区域はB区の南隣り、7m×27.5mである。土層の堆積は以下のとおりである。表土から最大1.7mまで盛土・擾乱等が堆積し、標高4.2～3mの範囲にわたって旧耕土及び灰色シルト層が堆積する。それより以下は層厚1.3mほどの砂層・砂礫層、ついで黒色粘土層（B層）が続く。層序の基本的堆積はA区、B区と同じである。

人力掘削を行った砂層より多量の自然遺体（流木・フングリ等）を検出した他は、遺構・遺物は検出されなかった。

6 F区（第8、9図・写真図版2、7）

F区の調査範囲は7×9m、C区からは約30mほど隔てた南側に位置する。基本層序はA～C区と同様で表上より1.5mまではバラスを含む盛土、旧耕土があり、その下に標高2.2m～2.5mまでは黄褐色の粘質土がほぼ水平堆積する。

それより下は1mほどの砂層・砂礫層が堆積するが、側溝、及び部分的な深堀の結果、GL-2.7m（標高0.8m）以下では黒色粘土層（B層）が認められた。砂層にはA～C区と同じく砂と有機質の互層が認められた。

調査は砂層まで重機掘削し、砂層を人力掘削でB層まで掘り下げた。この時、調査区南東隅においてフングリ集積地点（F-01）を検出した。これは



図8 F-01出土遺物

黒色粘土層（B層）の凹み状の地形の部分に、覆土の砂層によって覆われていたもので、この窪みに自然堅果類（ドングリ）が極めて多量に集中していたものである。当初、ドングリピットを想定したが、南壁面の部分的な断面を観察しても明確な掘方は認められず、ドングリ層の堆積も10cm程度とそれほど深いものではない。そのため、調査時においては遺構か自然堆積か判断に苦しんだ。覆土を全て持ち帰り洗浄した結果、多量の堅果類・皮類に混じって縄文土器片1点（6）を検出しており、自然の窪み地形に人為的にドングリを集積した可能性も考えられる。しかし、ドングリ類の分析をした結果としては、アカガシやコナラ類の他にイヌシデ、フジ属、センダン、ムクノジ、エゴノキなど雑多な種類が混じっており自然的な堆積と考えておきたい。

F区の出土遺物（6）は縄文土器片で、外面にはB区の（4）と同じく二枚貝条痕が施されている。

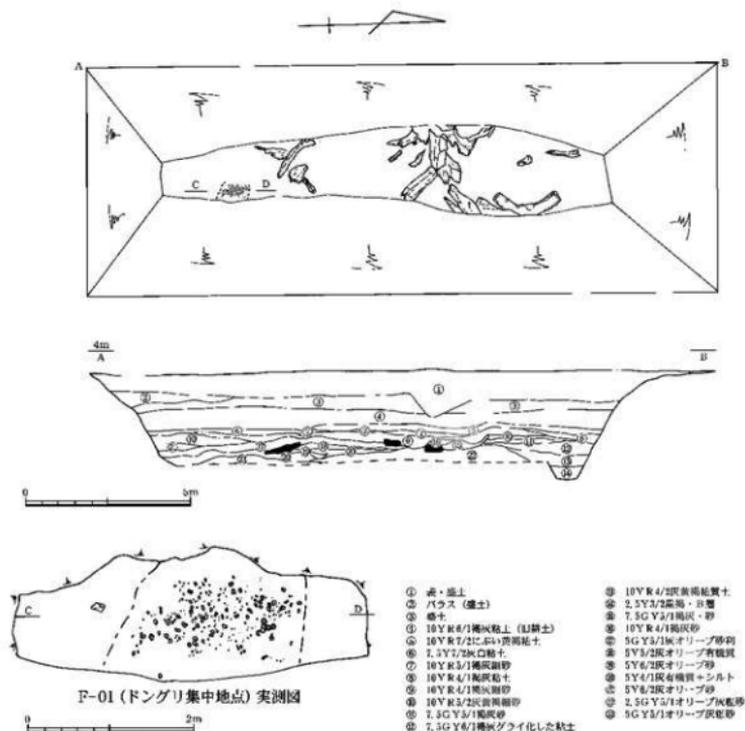


図9 F区平・断面図

7 G区 (第10、12図・写真図版3、7)

G区の調査範囲は7m×19m、北はF区に接し、南はH区に接する。G区の基本層序は、これより以北のA～C、F区と異なる。法古遺跡に広範に見られる砂層・砂礫層は認められるものの、有機質を含む黒色層の堆積が少なく、黒色粘土層(B層)も高くなってきている。

層序は以下の通りである。表土より-1.3mまで盛土、褐灰色粘土層が堆積する。その下の層厚0.3mほどの薄い褐～橙色のシルト層が認められ、その下標高3m以下から砂層・砂礫層が堆積する。この砂層は0.5～1.5mを測り、周辺調査区の砂層と比較すると層厚が薄い。砂層の下は周辺調査区と同じく黒色粘土層(B層)も認められた。

上のように、砂層の堆積は未発達であったが、黒色粘土層(B層)まで掘削した結果、G-01、G-02といった自然流路跡を検出することができた。これらの自然流路跡は黒色粘土層(B層)まで掘り下げた結果、砂層の堆積によって判別できたものであり、ある時期での自然河道であると考えられる。G-01、G-02以外でも砂層上の切会いや地形的な凹みも確認できた。

砂層内より黒曜石の剥片1点(7)が出土した他、遺物は皆無であった。この黒曜石は長さ4.3cm、幅2.3cmの剥片で細部の加工痕や刃部は見られない。



図10 G区出土遺物

8 H区 (第11、12図・写真図版3、7)

H区は12年度調査区の最南地点、G区の南側にあたる。調査期間が付近の下水道工事と重複したため、通行道を確保する必要上から当初の予定を変更しH1区、H2区に細分し調査を行った。以下、まとめて報告する。

H区の基本層序はA～C、F区とは異なり、北接するG区と類似している。砂層は認められるものの、有機質を含む黒色層の堆積が少なく、黒色粘土層(B層)も高くなってきている。

表土・盛土はGL-1.2mほど続きその下は0.5～1m程度の砂層が認められる。砂層の下には黒色

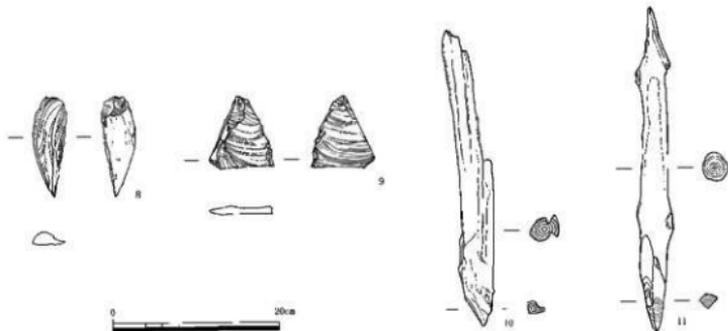
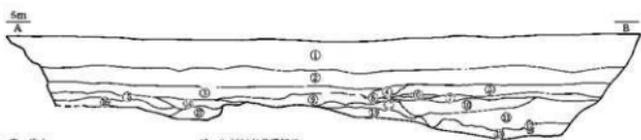
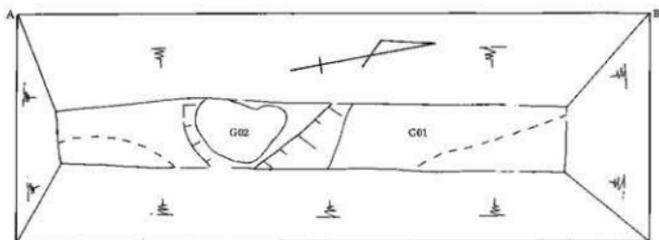
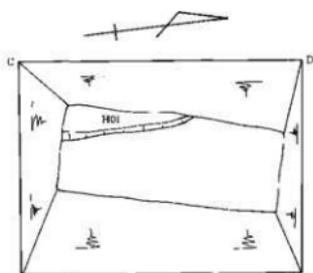


図11 H区出土遺物

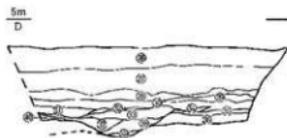
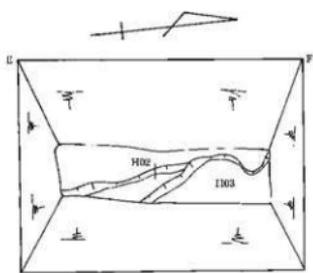


- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| ① 表・粘土 | ⑩ 2.5Y 6/1 黄褐色砂 |
| ② 10Y R 6/1 黄灰粘土 | ⑪ 2.5Y 6/2 ぶい層 |
| ③ 2Y R 6/3 緑シルト | ⑫ 7.5G 7/1 暗緑灰粘土ブロック |
| ④ 10Y 2.5/1 暗緑シルト・小礫含む | ⑬ 2.5Y 6/4 ぶい層砂 |
| ⑤ 10Y R 4/1 暗緑粘土 | ⑭ 7.5Y R 6/3 暗緑色の黄シルト |
| ⑥ 10Y R 4/2 暗砂 | ⑮ 7.5Y R 6/3 明緑粘砂 |
| ⑦ 2.5Y R 6/3 シルト | ⑯ 10Y R 5/2 灰黄粘・砂 |
| ⑧ 7.5Y R 6/1 暗緑シルト | ⑰ 2.5Y 6/1 黄灰細砂 |
| ⑨ 10Y R 4/3 ぶい黄緑シルト・スミ書 | |

0 5m



- | | |
|-----------------------|--------------------|
| ⑱ 表・黄土・バラス | ⑳ 表・黄土 |
| ㉑ 10Y 2.5/1 黄緑シルト | ㉒ 5Y 4/2 灰ナリ・ブ引粘土 |
| ㉓ 10Y R 4/1 暗 | ㉔ 7.5Y R 5/2 暗緑シルト |
| ㉕ 2.5Y 3/3 黄褐色砂 | ㉖ 7.5Y R 6/3 暗緑シルト |
| ㉗ 2.5Y 6/4 ぶい黄ブロック上 | ㉘ 2.5Y 6/1 黄灰粘土 |
| ㉙ 2.5Y 6/1 黄褐色砂 | ㉚ 5Y 6/6 4 リーブ面砂 |
| ㉛ 7.5Y 5/1 灰黄砂 | ㉜ 7.5Y R 6/3 暗緑土 |
| ㉝ 7.5Y R 3/1 黄粘土 (B期) | ㉞ 2.5Y 6/2 灰黄粘砂 |



- | |
|-------------------|
| ㉟ 5Y 2/1 黄粘土 |
| ㊱ 2.5Y 6/1 黄灰粘土 |
| ㊲ 10Y R 6/1 暗緑粘土 |
| ㊳ 2Y 5/2 灰ナリ・ブ有硬質 |
| ㊴ 2.5Y 6/1 黄灰粘土 |
| ㊵ 2.5Y 2/1 暗黄硬質 |
| ㊶ 2Y 5/1 黄粘砂 |

0 5m

図12 G・H区平・断面図

粘土層 (B層) が堆積するが、A～C、F区と異なりB層も0.5m程度と浅い。そのため、B層以下も掘り下げ地山の検出に努めた。その結果、標高1.8m付近で茶褐色砂質のシルト層が確認できた。

出土遺物は砂層より (8) (9) の石器2点、(10) (11) の杭2点を検出した。(8) の剥片は長さ6.1cm、幅2.0cm、厚さ0.8cm、(9) は長さ4.5cm、幅3.9cm、厚さ0.9cmを測る小形のもので、いずれも細部の調整や刃部が認められない黒曜石の剥片である。

(10) (11) は木製の杭である。(10) は長さ36.4cm、径4.0cm、(11) は長さ39.8cm、径3.1cmを測る。いずれも心持の杭であり、先端部は加工し上部は共に欠損する。これらの杭の検出は層位的には砂層より上のII耕上～黄褐色シルト層からの検出である。また、杭の腐蝕状況もあわせて考えると近現代のものと考えられる。

9 I区 (第13～18図、写真図版4、5、8～12)

I区の調査範囲は7m×24m、H区より11.5mの間、住宅密集地をはきんだ南側に位置する。基本層序は以下の通りである。表上より-1.1mまでは礫土・II耕上が水平堆積する。それより下は0.5～0.7m程度の層厚である灰～暗灰色シルト層 (包含層) が同じく水平堆積し、以下は黒色有機質層、灰色粘土層の包含層が堆積する。有機質層には多量の自然遺体、流木、葉片等と共に木製品の検出が認められた。標高1.3m以下には砂層、灰色粘上層 (地山?) が認められたが、砂層以下での遺物の検出は無かった。

灰色シルト (標高2m～2.5m)、黒色有機質層 (同2.5m～1.3m) からは、古墳時代～古代の上器を主体とした一定量の遺物 (土器・木器) が検出されたため、表土及び旧耕土は重機にて掘削し、灰色シルト層と黒色有機質層は人力掘削で調査を行った。特に灰色シルト層 (第1面) と黒色有機質層 (第2面) では面的な調査を実施した。

第1面は灰色シルト (標高2m～2.5m) において面的な調査を行った。調査の結果、幾つかの自然木の他は2基の土壇状のものを検出した。この2基 (I-01、I-02) は径0.5m程度の小さな土壇類であり、出土遺物もなく詳細は不明である。

第1面では明確な遺構がほとんど見られなかったため、灰色シルト層を人力にて除去し黒色有機質層の検出を行った。その間に多量の遺物の出土が見られた。これには土器・石器の他に保存状況の良

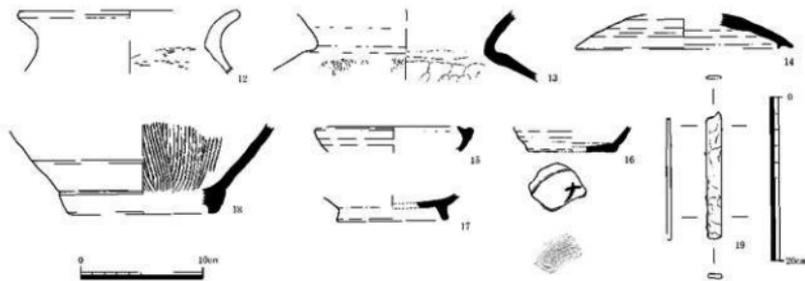
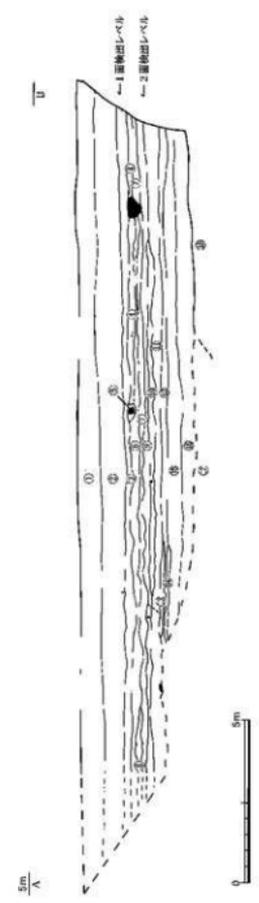
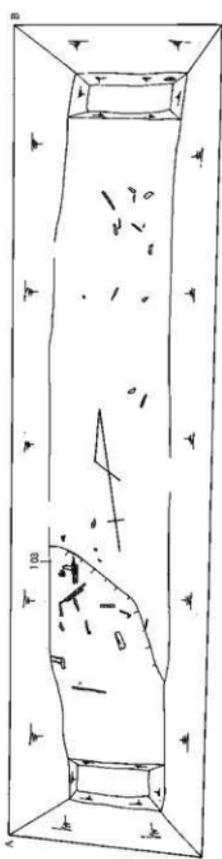
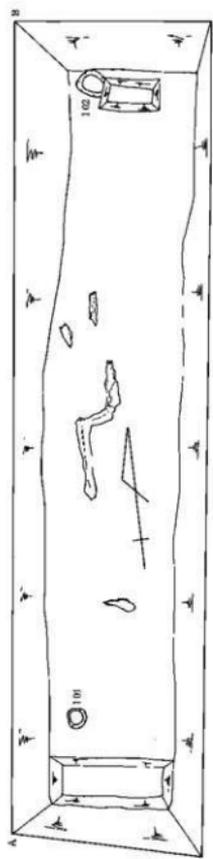


図13 I区表盛土～旧耕土出土遺物



- ① 泥・砂上
- ② 灰褐色面土
- ③ 灰褐色の塊いシルト (伴行埋物)
- ④ 灰褐色面土
- ⑤ 灰褐色の塊いシルト (伴行埋物)
- ⑥ 灰褐色面土
- ⑦ 灰褐色の塊いシルト (伴行埋物)
- ⑧ 灰褐色面土
- ⑨ 灰褐色の塊いシルト (伴行埋物)
- ⑩ 灰褐色面土
- ⑪ 灰褐色の塊いシルト (伴行埋物)
- ⑫ 灰褐色面土
- ⑬ 灰褐色の塊いシルト (伴行埋物)
- ⑭ 灰褐色面土
- ⑮ 灰褐色の塊いシルト (伴行埋物)
- ⑯ 灰褐色面土
- ⑰ 灰褐色の塊いシルト (伴行埋物)
- ⑱ 灰褐色面土
- ⑲ 灰褐色の塊いシルト (伴行埋物)
- ⑳ 灰褐色面土

图14 一区平・断面图

好な木製品も含まれている。

黒色有機質層において第2面の面的な調査を実施した結果、自然木と木製品が同時に出土した。出土状況はI区でも北半分は自然木・木製品の出土は過少であり、南半分は過多

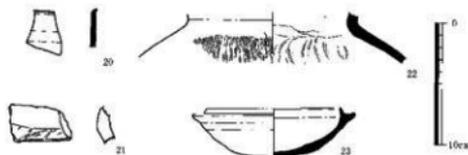


図15 I区第1面出土遺物

であった。I区全体的にみても、南接するJ区と比較すれば過少である。すなわち、自然木・木製品類の出土は南へ行くに従って多くなっている状況であった。

面的調査の結果、自然木と木製品の検出の他は顕著な遺構は存在しなかった。そのため、かかる黒色有機質層は沼状の湿地として堆積した状態を想定した。特にI区の中央付近では(ある時期での)沼状湿地の「落ち」と考えられる痕跡を検出した(I-03)。これより以北では自然木・木製品の出土が急激に少なくなり、以南からJ区にかけては自然木・木製品の検出が極めて多く、沼状の湿地であったと想定される。

以下、I区の出土遺物について層毎・面毎に述べる。

(12)～(19)は表・盛土～旧耕上から出土した遺物である。(12)は土師器で甕口縁である。口縁部は厚く湾曲して外反し、推定口径は18.0cmである。外内面ともナデしており、頸部から下はヘラ削りが見られる。

(13)～(17)は須恵器である。(13)は甕の頸～肩部で、口縁端部が残存していないため頸部で径を復元した。推定頸径は14.0cmである。肩部には外面に叩き目文、内面に当て具痕が見られる。

(14)は7世紀後半の坏蓋である。外内面ともに横ナデが施されている。輪状つまみが存在していたと思われる痕跡があるが、残っていない。かえりは非常に短く、全体的になだらかでほぼ平らな形に収まる。(15)は7世紀初頭～前葉の坏身である。立ち上がりは短く内向している。推定口径は10.4cmで小ぶりである。(16)は9世紀以降の坏である。底部は回転糸切りで、墨書が見られる。漢字の「大」に近い文字だが、他の文字の可能性は十分にある。(17)は8世紀前葉の坏高台部である。比較的高い高台で、内面に仕上げナデを施す。

(18)は陶器製のすり鉢で、外面に2条の沈線を施し、内面は溝が9～11条を1単位として、全体に施されている。

(19)は長さ10.3cm、幅1.1cmの鉄片で刃部等はない。腐蝕のため鋸が全面に見られる。

(20)～(23)は第1面(灰色シルト層)精査時の出土遺物である。(20)は青磁の口縁である。残長2.9cm×3.5cmの細片である。(21)は土師器で甕頸部片である。口径、頸径ともに残存が非常に少ないため不明である。

(22)(23)は須恵器である。(22)は甕頸～肩部片である。(23)は6世紀末～7世紀初頭の坏身である。立ち上がりは短く、やや内向する。全体的に横ナデだが、外面底部は粗雑で様々な跡がある。内面は不定方向のナデで仕上げている。

(24)～(68)は包含層出土遺物である。この包含層は第1～2面間、灰色シルト～黒色有機層か

らの人力掘削において検出されたもので、調査中は上層と下層で取り上げを区分した。しかし、調査の結果、層毎のまとまりは認められず、时期的にも極めて幅が広いため、包含層出土遺物としてまとめて報告する。

(24) (25) は弥生後期の複合口縁の甕口縁である。口縁端部は薄く、直線的に伸びて丸く収める。この特徴から、草田編年の第5期に相当すると思われる。共に風化しているが、調整は主に横ナデ、ナデである。

(26) は甕頸～肩部である。外面に縦ハケ目を施す。(27) (28) は共に甕口縁で、20.0cm前後の口径を持つ。外面は縦ハケ目、ナデを施し、内面はヘラ削りである。(28) は口縁部内面に横ハケ目が見られる。(29) は坏底部である。(30) は甕の底部である。端部接地面はわずかに平らな部分があり、内面をヘラ削りした後、1.0cm横ナデを施す。下端から2.0cmのところ、直径0.8cmの透孔を1ヶ所施す。推定底径は18.4cmである。(31) (32) は高坏脚部片である。(33) (34) は把手である。いずれも5.0cm前後の長さを測る。

(35) ～ (57) は須恵器である。ここでは、8世紀前葉～9世紀後半頃の時期のものが出土している。(35) は8世紀前葉の輪状つまみの坏蓋である。口縁端部が残存していないためはっきりとわからないが、同じ所から出土している(36)は端部のみ残存の坏蓋であり、その端部は垂直に屈曲していることから、(35)も端部が垂直に屈曲している可能性があると思われる。(37)は小型甕口縁である。(38)は甕頸～肩部である。外面に叩き目文、内面に当て具痕が見られる。(39)は甕か甕の胴部片である。(40)は高坏の坏部と脚部の接合部分である。(41) (42) (45) ～ (57)は全て坏である。(41)は9世紀末以降のもので、口縁部は大きく外反し、調整はやや粗雑である。(43)は9世紀の皿である。無高台で口縁部は直線的に外反する。(44)は坏蓋にしては口径が大きいので皿として実測したが、自然軸の付着状態などから坏蓋の可能性もあると考えられる。(45)は9世紀のもので、ほぼ垂直に立ち上がる。(46) (47)は8世紀の出雲地方の主流と思われる坏で、無高台で口縁端部がわずかにくびれ、体部は内湾している。(48)は9世紀のものである。高台は低く、内側に入り込んでいる。(49) (50)は8世紀前葉で高台はやや高く、外に向かって傾斜している。(51)は8世紀末～9世紀前半のものである。体部は直線的に閉き、高台は底部の最も外側についており、非常に低い。(52)は9世紀半頃～後半のもので、調整は粗雑である。(53)は8世紀前～後半のものである。焼成は不良で、そのため調整もわかりにくい。沈線らしき2条の線が見られる。(54)～(57)は全て底部が回転糸切りによって切り離されている。(54)は8世紀後葉、(55)～(57)は8世紀末～9世紀前半であると思われる。調整は全て横ナデ、ナデで、量産されていたと思われるような粗雑な作りとなっている。体部は(54)はやや内湾するが、(55)～(57)は外に向かって直線的に開く。

(58)～(60)は石器である。(58)は花崗岩製の石皿と思われる石器で、表面は何かで擦ったような使用痕が見られ、中心に向けてなだらかに丸く窪んでいる。長さ9.5cm、幅7.4cm、厚さ2.4cmを測る。(59)は流紋岩を使用した石錘である。自然隙の長軸の両端を打ち欠いて作ったものであり、他の調整は見られない。長さ9.2cm、幅7.6cm、厚さ3.2cmを測る。(60)は(59)と同様流紋岩を使用した打製石鎌で、長さ16.0cm、幅9.1cm、厚さ2.2cmを測る。全体的に加工してあり、縁辺は鈍い刃部を

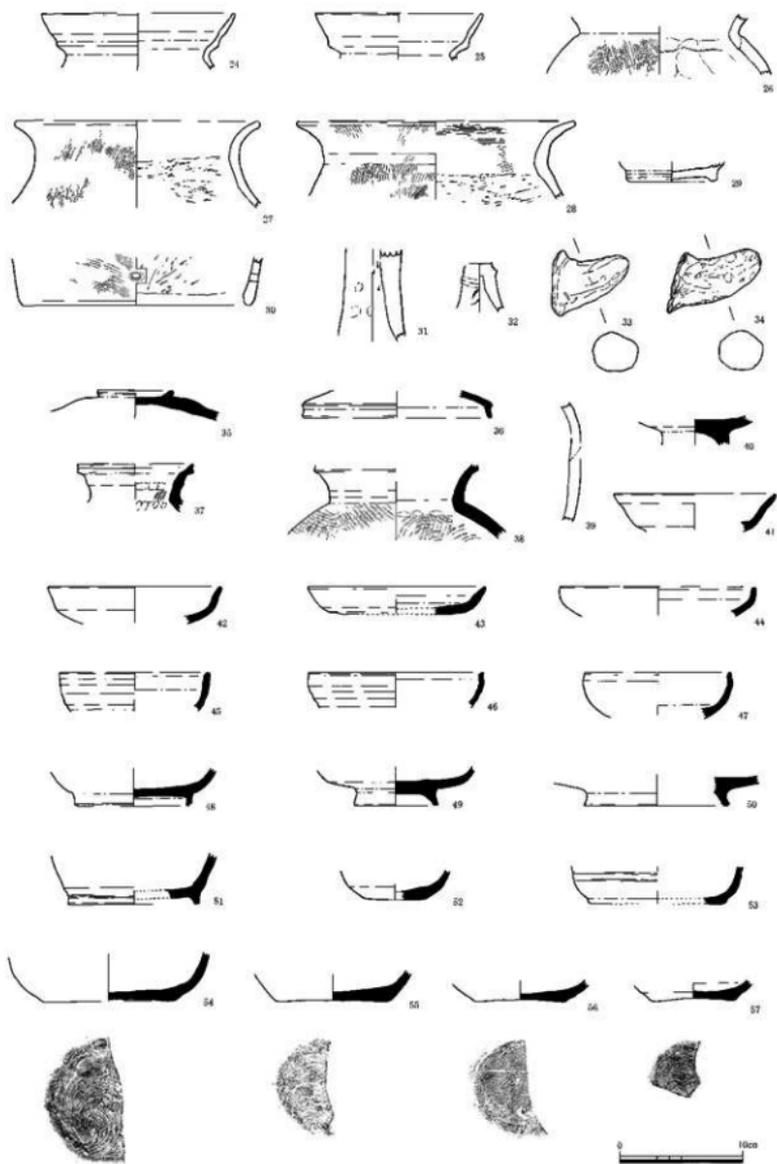


图16 I区包含层(1~2面副)出土遗物1

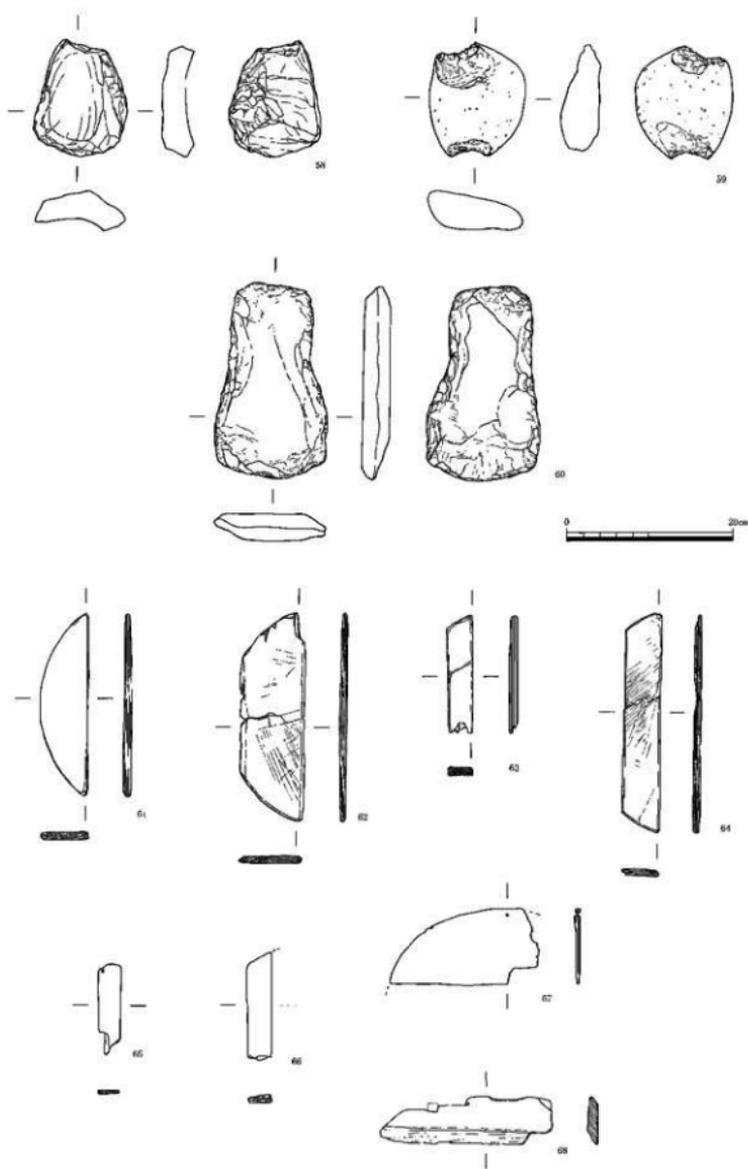


图17 I区包含层(1~2面间)出土遗物2

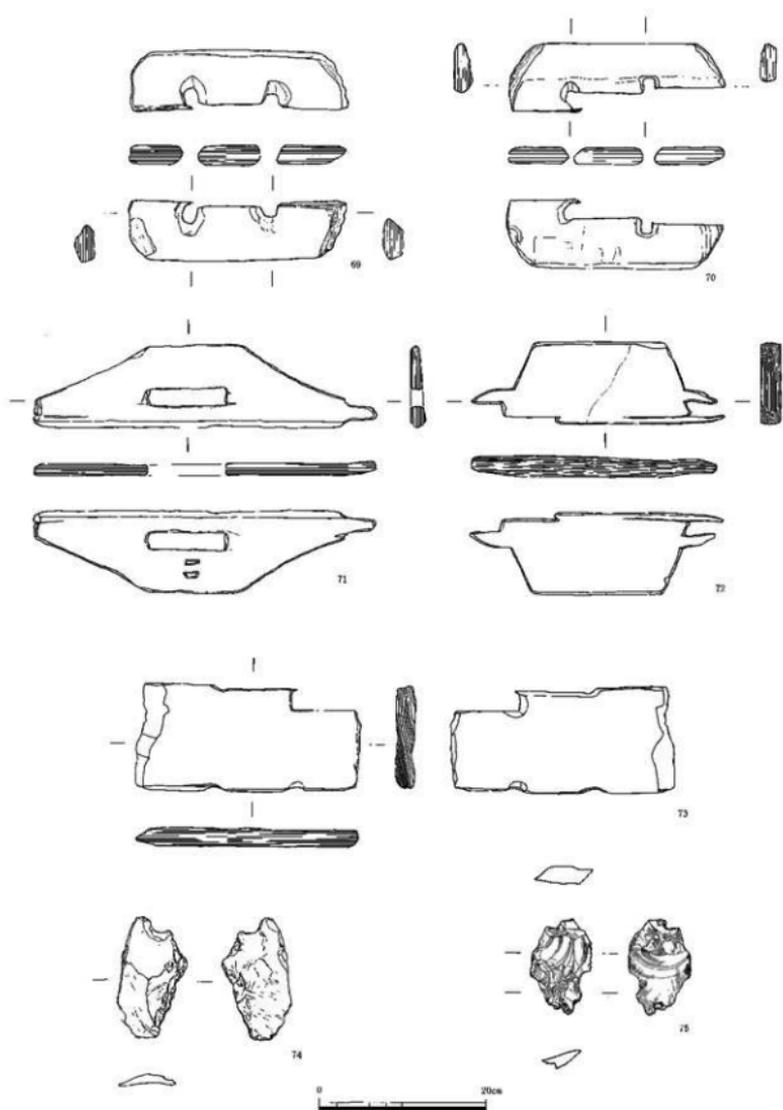


图18 I区第2面(黑色有机质层)出土遗物

作っている。

(61)～(68)は木製品である。全て曲物容器の一部であると思われる、いずれも柁目材の周縁を凹形に削っている。(62)(64)は表面に刃物のようなもので切り付けた跡が見られる。使用痕か。また(67)は周縁の中心付近に0.3cmの穿孔が1ヶ所施されている。いずれも25.0cm前後の長さである。(68)は残長20.7cm、幅5.9cmを測る木製品で、2ヶ所に穿孔痕が認められる。

(69)～(73)は木製品である。(69)～(71)は田下駄である。四隅を丸く削り、長方形の形を呈している。穿孔は各2ヶ所ずつ施されている部分が残存している。(71)は梓組田下駄の枠材で図左側の接続部を欠損している他は残りが良い。幅10.2cm、厚さ1.8cm、残長41.6cmを測り、スギ材である。(73)は同じくスギ製の木製品で長さ27.3cm、幅13.1を測る。平面形はシャープな台形に耳状の突起が付いている。この突起部分が別の部材と接続すると思われるが、この他には木製品の縁辺部にもほぞ穴、木釘等の痕跡は認められない。後述するように田下駄(足駄形)の部材(三角板)と考えている。

(74)(75)は石器である。共に剥片であり、細部の加工痕や刃部は見られない。(74)は硬質頁岩、(75)は黒曜石である。

10 J区(第19～24、写真図版12～16)

J区の調査範囲は7m×12m、I区に南接し、調査範囲内では最南地点に位置する。土層の堆積状況は以下の通りである。

表土より-1.2mまで盛土・旧耕土が水平堆積する。その下に暗灰色シルト層(包含層)が堆積し、標高3.0m以下は黒色有機質層・灰色粘土層(包含層)が複雑に堆積する。これら包含層の下、標高2.0m以下は青色・オレンジ色のきれいな粗砂～細砂の砂層が、標高1.5m以下は地山?層が堆積する。I区と同じく砂層以下での遺物の検出は皆無であった。

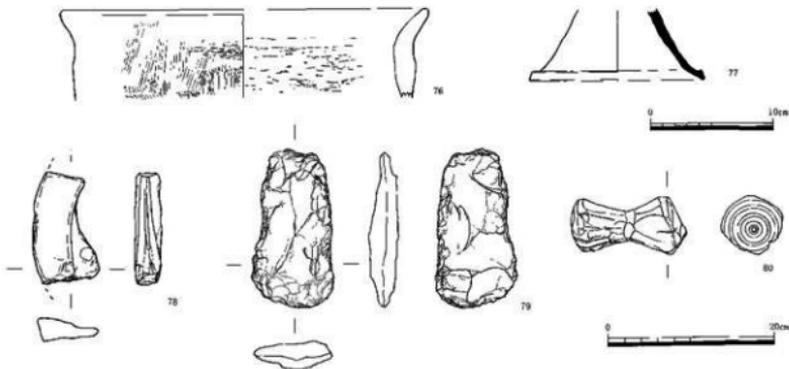


図19 J区表・盛土～1面出土遺物

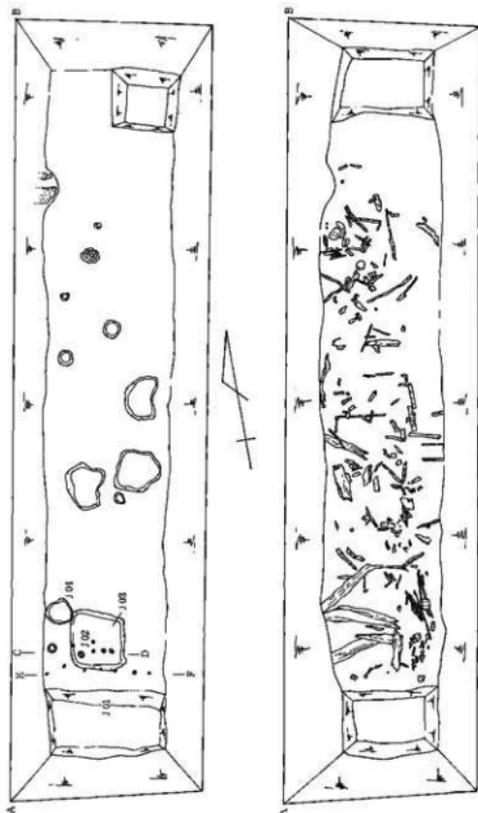
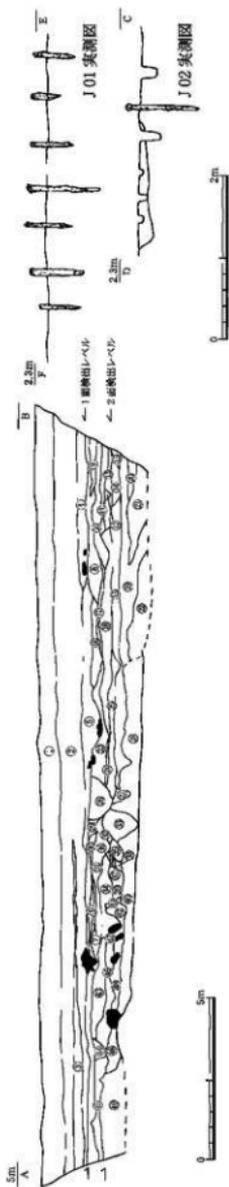


図20 J区平・断面図

- ① 赤い砂土
- ② 灰白色砂土
- ③ 灰白色砂土
- ④ 灰白色砂土
- ⑤ 灰白色砂土
- ⑥ 灰白色砂土
- ⑦ 灰白色砂土
- ⑧ 灰白色砂土
- ⑨ 灰白色砂土
- ⑩ 灰白色砂土
- ⑪ 灰白色砂土
- ⑫ 灰白色砂土
- ⑬ 灰白色砂土
- ⑭ 灰白色砂土
- ⑮ 灰白色砂土
- ⑯ 灰白色砂土
- ⑰ 灰白色砂土
- ⑱ 灰白色砂土
- ⑲ 灰白色砂土
- ⑳ 灰白色砂土
- ㉑ 灰白色砂土
- ㉒ 灰白色砂土
- ㉓ 灰白色砂土
- ㉔ 灰白色砂土
- ㉕ 灰白色砂土
- ㉖ 灰白色砂土
- ㉗ 灰白色砂土
- ㉘ 灰白色砂土
- ㉙ 灰白色砂土
- ㉚ 灰白色砂土
- ㉛ 灰白色砂土
- ㉜ 灰白色砂土
- ㉝ 灰白色砂土
- ㉞ 灰白色砂土
- ㉟ 灰白色砂土
- ㊱ 灰白色砂土
- ㊲ 灰白色砂土
- ㊳ 灰白色砂土
- ㊴ 灰白色砂土
- ㊵ 灰白色砂土
- ㊶ 灰白色砂土
- ㊷ 灰白色砂土
- ㊸ 灰白色砂土
- ㊹ 灰白色砂土
- ㊺ 灰白色砂土
- ㊻ 灰白色砂土
- ㊼ 灰白色砂土
- ㊽ 灰白色砂土
- ㊾ 灰白色砂土
- ㊿ 灰白色砂土



調査はI区と同じく表盛土・旧耕土重機にて掘削し、包含層（暗灰色シルト層）以下は人力掘削で調査を行った。また、同じく灰色シルト層（第1面）と黒色有機質層（第2面）にて面的な調査を実施した。

第1面は灰色シルト（標高3m）において面的な調査を行った。調査の結果、2列の柵列、10基の不定な土塊類を検出した。

J-01の柵列は7本の杭が45cm前後の間をおいて等間隔に打ち付けられている。主軸は磁北よりN-76°Wである。杭（図2J（82）～（88））は短いもので37.1cm、長いもので85.9cmを測る。一方、J-02の柵列は残存した杭は1本（同（81））、その他はビット類であった。主軸はJ-01と同じくN-76°Wである。

杭の他に検出した土塊群はいずれも不定形なもので、出土遺物も皆無であった。また掘削の結果、明らかに自然木と考えられるものもあったため、全てが明確な遺構であるとは言えず詳細は不明である。

第1面（灰色シルト層）の時期であるが、明確な時期比定を行い得る遺物は少ない。J区の表土・耕土、1面精査では、打製石鍬（79）、土師器（76）、須恵器（77）、瓦（78）など時期的な幅が大きい。また、I区での同じ灰色シルト層（第1面）の精査段階では青磁片（20）も出土している。そのため、J区、1面の杭・土塊群の時期としては中・近世以降を下ることはないと考えたい。

第1面の調査後、灰色シルト層を除去し黒色有機質層の検出を行った。この人力掘削において比較的多量の遺物が出土した。

この黒色有機質層において第2面の面的な調査を実施した結果、多量の自然木と木製品が出土した。面的調査の結果、自然木と木製品の検出の他は顕著な遺構は存在せず、調査区全面にわたって自然木と木製品が折り重なった状況で出土した。そのため、かかる黒色有機質層は沼状の湿地として堆積した状態を想定した。その遺物出土量は北接するI区に比して過多であった。

以下、J区の出土遺物について層毎・面毎に述べる。

(76)～(80)は表・盛土～1面にて出土した遺物である。(76)は土師器で壺口縁である。口縁部は軽く外反し、胴部はほぼ垂直になっている。外面は横・縦・斜めハケ目が施され、内面はヘラ削りが見られる。外内面とも調整の後、口縁に横ナデを施している。推定口径は29.6cmと大きい。

(77)は須恵器で高坏脚部片である。

(78)は瓦の一部で周縁が2.3cmと広く、外区には連珠文が配される。復径20cmの軒丸瓦である。

(79)は打製の石鍬である。材は流紋岩を使用しており、荒削り後、縁辺を調整し刃部を作っている。

(80)は木鏝である。心持材の両端近くから側面中央に向かって斜めに削り込み、側面から見て放形にしている。長さ13.9cm、長幅7.1cm中央幅3.8cmを測る。材はヤブツバキ。

(81)～(88)はJ-01、J-02出土遺物である。(81)がJ-02でその他はJ-01出土の杭である。(81)は4方向に削り落とし、先端がわずかに湾曲している。全体的に樹皮が残っている。(82)は1方向を斜めに削り落とし、先端は枝の根元部分が残存しており、中程に自然な湾曲が見られる。(83)は4方向に削り落とし、他の杭と比べて先端が尖っているのではなく、扁平状に削られ

ている。(84)は先端の断面が四角形になるように4方向に削り落としている。樹皮を多く残す。(85)はこの中で最も短い37.1cmを測る。4方向に削り落とし、先端は尖っている。(86)は先端の削る範囲が狭いが、3方向に削り落とす。(87)は3方向から削り落とし、尖っている。また上端に面取りを施す。(88)は4方向に削り落とし、(87)同様尖っている。樹皮を多く残す。(81)(82)は90.0cm程度、(83)(84)(86)～(88)は50.0～70.0cmの長さを測る。J-01、02の杭8本のうち、鑑定した5本の材はいずれもアカマツであった。

(89)～(108)は包含層出土遺物である。この包含層は第1～2間面、灰色粘土～黒色有機層からの人力掘削において検出されたものであるが、細かな分層が困難であったため、包含層出土遺物としてまとめて報告する。

(89)(90)(95)(96)は弥生土器である。(89)は弥生中期中葉の無形壺口縁である。残存が小片のため、口径は不明である。4条の凹線文を施し、内面にはナデ、斜めハケ目が見られる。(90)は弥生後期後葉の甕口縁である。(89)同様口径は不明で、口縁に5条凹線文を施す。(95)(96)は弥生後期頃の甕か壺の底部片である。共に胎土は密である。

(91)～(94)は土師器である。(91)は甕口縁である。口径は18.6cmを測る。口縁は単純口縁で、布留式の流れを引いていると考えられる。古墳前期、つまり草田編年の第7期頃に相当すると思われる。(92)は高環底部片である。環の下部との接着面があらわになっており、接着させるための溝が隙間無く刻まれている。直線的に外反している。(93)は高環脚部、(94)は浅い椀のようなもので、調整はナデのみである。

(97)～(102)は須恵器である。(97)は6世紀末～7世紀初頭の環蓋である。推定口径は13.8cmを測る。回転ヘラ削りが施され、稜もくっきりついている。外面には自然軸が付着している。(98)は甕か壺の口縁である。外面に丁寧な波状文が施されている。(99)は提瓶の基部片でありボタン状に退化した取手が付く。(100)は短頸壺口縁である。外面には叩き目文、内面には当て具痕が見られる。また、外面には自然軸が付着している。(101)は坏底部片である。2条の沈線が確認できるが、調整は粗雑である。(102)は高環脚部片である。

(103)～(107)は石器である。(103)は硬質頁岩を使用した剥片である。縁辺部分に細部調整も見られ、不定形刃器の可能性もある。長さ16.3cm、幅10.1cm、厚さ1.6cmを測る。(104)は細粒アブライト質花崗岩を使用した局部磨製石片である。表面上部右方面に集中して敲打痕が見られるため、叩石に転用した可能性もあるが、下部は部分的に研磨痕が残る。(105)は硬質珪質頁岩、(106)は流紋岩、(107)は硬質頁岩の剥片である。

(108)は木製品で、人形であると思われる。上部に首のような切り込みが両側から入っているが、表・裏面共に墨書等の痕跡は認められない。

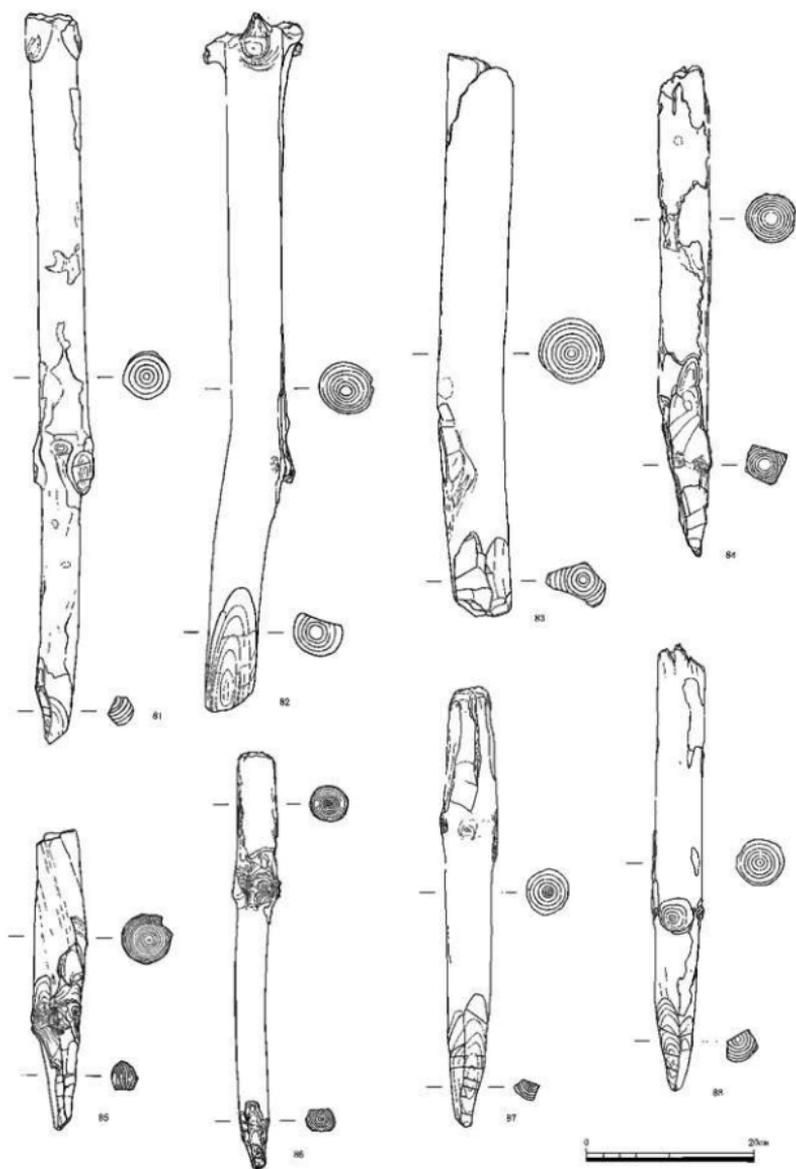


图21 J区J-01、J-02出土遗物

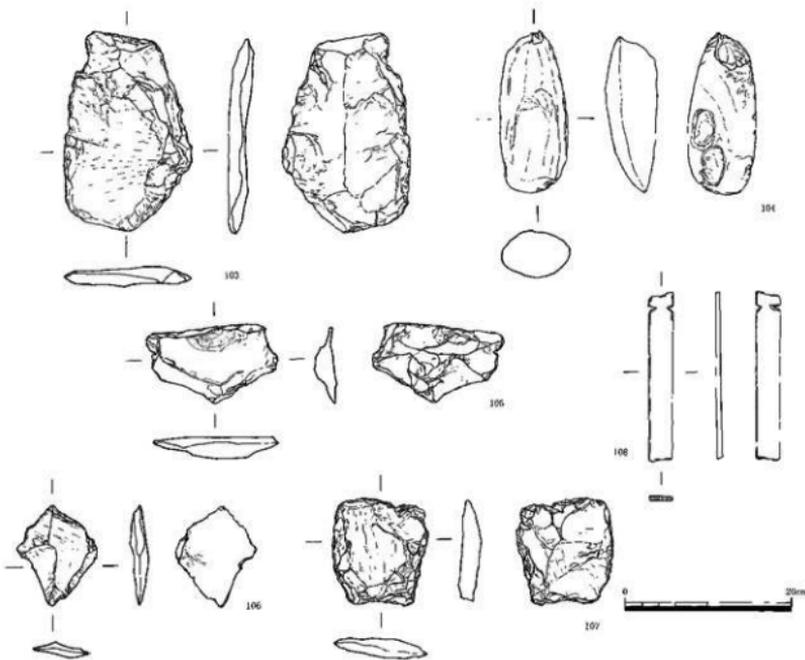
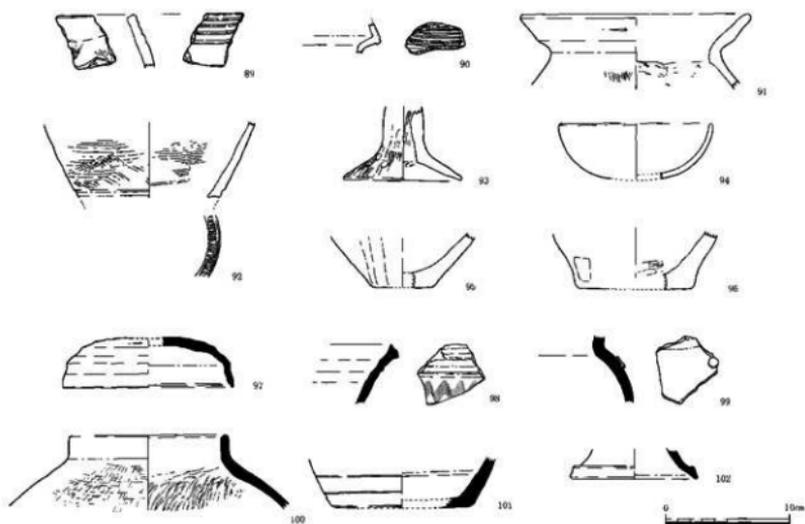


图22 J区包含层(1~2面间)出土遗物

(109) ~ (113) は第2面 (黒色有機質層) の出土遺物で、土器・石器である。

(109) ~ (111) は土師器である。(109) (110) は高坏脚部である。(110) は透孔を1ヶ所施す。(111) は甕口縁である。

(112) (113) は石器である。(112) は極細粒凝灰質砂岩を使用した打製石鎌と思われる。調整はあるが、粗雑なためわかりにくい。

長さ17.2cm、幅10.3cm、厚

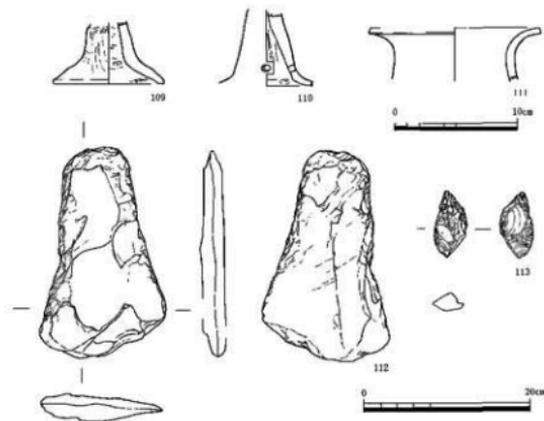


図23 J区第2面出土遺物1

さ2.0cmを測る。(113) は黒曜石の剥片である。先端部分を尖頭状に加工しているため石鎌の未成品であると思われる。長さ4.1cm、幅2.0cm、厚さ1.1cmを測る。

(114) ~ (124) は第2面 (黒色有機質層) の出土木製品である。(114) ~ (116) は卍下駄である。(114) は表裏共に全面に削りが認められ、丁寧に調整されている。穿孔は4ヶ所施されており、両縁は、二角もしくは丸く加工されている。孔間の間隔は7.0cm、9.3cmで孔間には糸擦れと思われる擦り減り部分が見られる (図版15)。(115) は(114)と同様だが、全面の削りは見られない。両縁も、(114)ほどくっきりと削られておらず、四隅を丸くしている。穿孔は4ヶ所ある。孔間は長間7.7cm、短間6.1cmを測る。木目か圧痕かの区別は不明瞭であるが、緒孔地点に幅1.3~1.5cm、深さ0.2cm、の凹みが最大22.2cmにわたって認められる (写真図版15)。

(116) は穿孔2ヶ所だが、もう2ヶ所存在したと思われる痕跡がある。これは、(114) (115) と比べて丸くなく、長方形を呈する。(117) は用途が明瞭ではないが、穿孔は2ヶ所施されている。(118) は穿孔の跡が2ヶ所確認でき、卍下駄の可能性もあるが断定はできない。

(119) ~ (122) (124) は板状の木製品である。いずれも用途は明確ではないが建築部材等の一部と考えられる。(119) 77.5cm、(120) 81.9cm、(121) 96.1cm、(122) 97.0cm、(124) 45.8cmを測る。(123) は下端に穿孔のような痕跡が見られる。

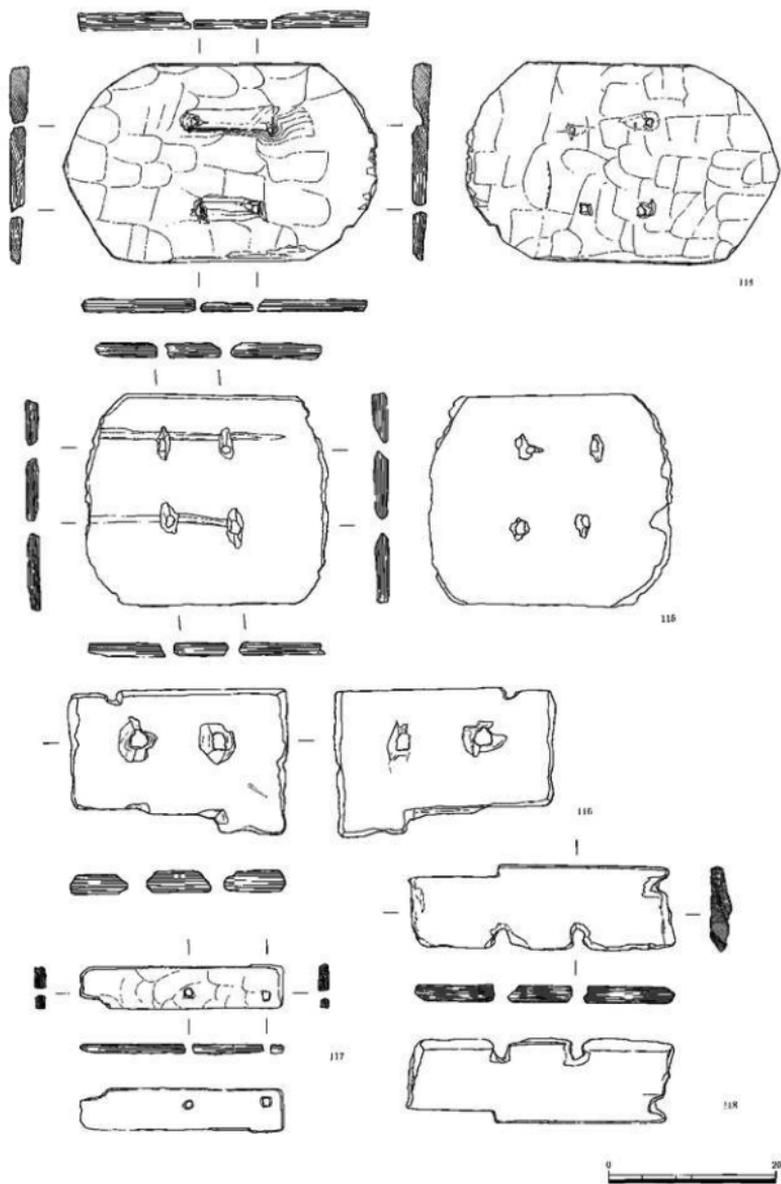


图24 J区第2面出土遗物2

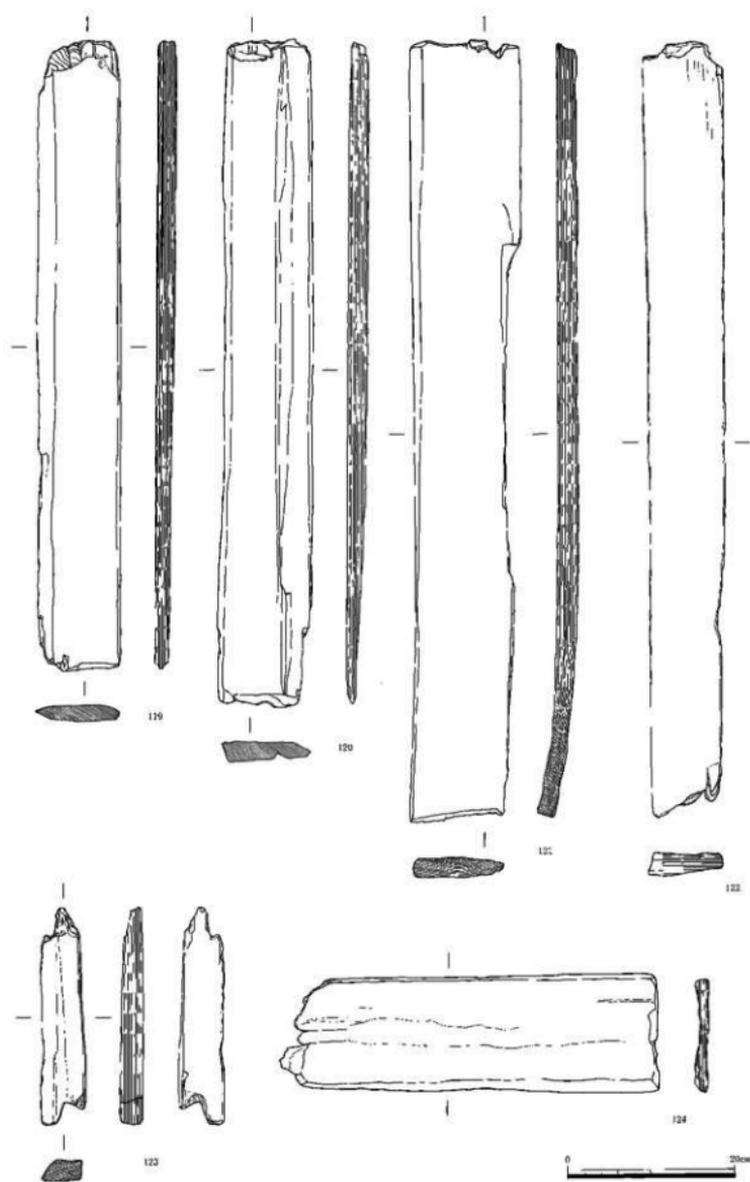


图25 J区第2面出土遗物 3

第4章 まとめ

4-1 遺跡の範囲について

法吉遺跡は昭和初年、耕地整備に伴う灌漑水路の掘削で遺物が出土し、1949年に排水用土管の埋設工事に際して土器片が出土している。それ以来、縄文土器（晩期）や弥生土器（前～中期）、石鏃、土錘などが出土する遺跡として知られており（穴道 1986 風十記の丘資料館1977）、松江市遺跡地図の遺跡番号はK001、鳥根県遺跡地図ではD2で同じく「散布地」と記載されていた（松江市教育委員会 1991、鳥根県教育委員会 1987）。

一方、遺跡の発掘調査としては1983年に松江市教育委員会が9ヶ所のトレンチ調査を行った結果、遺構は皆無で、砂礫層より縄文～弥生の遺物が数点出土している（未報告）。そのため、谷筋、ないしは西丘陵裾部から流出した結果、遺物が包含されたものと考えられていた。

本発掘調査においても、調査地北半（A～C、F～H区・880m²）では遺物の出土がほとんどなく、磨耗した縄文土器片5点と黒曜石4点、あとは近現代の杭2本のみであった。特にこれらの遺物の大半が砂礫層から出土していることから、同じく谷底などの旧流路に堆積したものと言えるであろう。このような環境から調査地北半分、A～H区範囲は基本的には遺跡の範囲外であったと評価したい。

一方、調査地南半（I・J区）からは、かなりまとまった遺物の出土が見られた。出土遺物の時期は打製石鏃（縄文）から糸切の須恵器（9・10世紀）まで幅が広く、また、時期不詳な木製品が多数を占めている。

これら遺物の出土は大部分が旧耕土の下、暗灰色のシルト～黒色有機質層からの出土であった。同層からは多量の自然木、葉片等の出土もあり、沼状の湿地状態が想定できるため、遺物の多くはこれら自然の低湿地に廃棄、ないしは流入した遺物と考えられる。遺物の時期幅が大きく、層毎にまとまりがないことも、二次的な堆積が多かったことの証左といえるであろう。

今次の調査結果が上のような状況であったため、法吉遺跡の範囲は法吉町でも南より～春日町にかけての地点に遺跡の中心地が拡がると考えられる。

とはいえ、上述した堆積状況であったため、法吉遺跡そのものから集落跡や墓域が検出される可能性は低く、むしろ地盤が安定している、調査地西側の丘陵裾部等で検出されるのではないであろうか。今後は周辺地を含めた調査の必要性があると言えよう。

4-2 遺跡の変遷について

今次調査では遺跡北半（A～C、F～H区）に広範に砂層が堆積していたことが明らかになった。これらの砂層は遺物が極めて少ないものの、ほとんど全てが縄文土器片、及び黒曜石であり、弥生以降の土器類は皆無であった。縄文土器は全て細片であったが、1983年のトレンチ調査では同じ砂層と考えられる層から縄文晩期の土器が出土している。つまり、考古学的な判断では、調査地北半に見られた自然流路跡は縄文時代まで（晩期）を上限として埋没したものと考えられることができる。

かかる砂層には細砂、有機層、粗砂層が認められ、ある時期はゆっくりとした水の流れがあり、あ

る時期は湿地になり、ある時期は突発的な流れになるなどの、幾つかの変遷があったものと考えられる。周辺地形を考慮すると、遺跡地周辺は上流の田中谷から続く谷状の地形にあり、これら検出した砂層（自然流路）もこういった谷地形の一部を形成していたものと考えられる。このような地形（湿地～自然河道）のもと、法古遺跡周辺では古くは縄文時代から人々の活動があったことが想定できるのである。

先述した田中谷は法古遺跡の上流に位置するが、弥生時代～古墳時代の住居跡が検出されている。法古遺跡では弥生時代の遺物はほとんど見られなかったものの、古墳時代～古代にかけての遺物が調査地南半（I・J区）から出上している。特にI区とJ区にまたがる地点では沼状の湿地が広がっていたことが明らかになった。

『出雲国風土記』鳥根郡の条には「法古の城。周り五里（2.7km）、深さ七尺許（2.1m）。鶯鶯・免・鴨・鯛・須我毛有り。夏の節に当たりて、尤も美き菜有り。」との記述がみえ（萩原千鶴訳 1999）、カモやオシドリなど水鳥が群がっていた小池の状況が描かれている。また、松江開府前の地図にもこの一帯には小湖が描かれており（内田1983）、近世以前の当該地周辺が池・沼等の湿地であったことが伺われる。今次調査の成果と比較しても、当地が軟弱な低湿地であったことは明らかである。

考古学的には、I区からJ区にまたがる沼状の湿地から打製石鏃、黒曜石剥片、弥生土器片類がわずかながら出土している。古墳時代の土師器・須恵器も一定量出土し、7～8世紀の須恵器も比較的多い。新しいものでは9～10世紀の底部糸切りの須恵器が出土した。

これらの状況から、I区・J区にみられる沼状の湿地は古く縄文時代に遡り、古墳～8世紀には遺物が多量に破棄・流入し、以後、9世紀前後を上限として最終的に埋没したものと考えられることができる。

J区上面（第1面）では中・近世～と考えられる杭列が検出されており（J-01、J-02）、層位的にはその上に近・現代の灰色旧耕土、及び盛土が堆積する。従って、沼状湿地が埋没した9～10世紀以降は水田として利用され現在に及んでいるものと判断できる。

4-3 出土土下駄について

法古遺跡の調査で出土した遺物は土器・石器・木器である。土器は細片が、石器は剥片が大半を占めている。その中では木製品の出土が特筆すべきものである。これはI区とJ区にまたがる沼状の湿地（黒色有機質層）から出土したもので、本文で述べたような出土状況から保存状況が比較的良好であった。

時期を確定するような出土遺物の幅が大きく、明確な時期比定が困難である。調査結果としては木製品が出土した包含層、及び黒色有機質層からは打製石鏃や石器の剥片（黒曜石・頁岩など）も認められる一方、最も多いのは古墳～8・9世紀代の遺物である。

以上の出土状況から判断して、出土木製品の大半は古墳時代～古代という漠然とした時期幅を考えている。出土遺物の相対的な量から考えると古墳時代に属する可能性が高いが、木製品自体からより細かな年代観が与えることは今後の課題の1つである。

以下、出土土下駄の2、3の観察結果を述べておきたい。

出土した田下駄のうち最も残りの良好なのは(114)(115)の2点、足板部の完形品であり、材質はいずれもスギである。(114)は両辺を隅丸いやや先尖ぎみに加工した横長形、(115)がほぼ方形を呈しており、緒孔の数は共に四孔を穿つ。特に(114)の裏面(図24の左)には孔穴間に糸擦れと思われる痕跡が明瞭に残っている(写真図版15)。また、民俗例では足先側の前二孔間は広く、踵側の後二孔間は狭いとされている。

以上のことから、(114)の田下駄は紐状のものを図の左右方向に対して通し、図左側を接地面にし、図上側を足先に足に縛り、結緒とした形態が想定できる。緒孔は中央やや左向きに偏向するため、使用者は右足に装着したのではないであろうか。また、糸擦れの痕跡以外には他の部材を取り付けた痕跡は存在しないため、単独の「枠なし四孔横長型」形式であると考えられるであろう。

(115)の田下駄については緒孔のある位置に左右に走る浅い凹み状のものが見られる(写真図版15)。これは木目か痕跡かの判断に苦しむものの、圧痕の場合、何らかの横木で補強した状況も考えられなくもないが、足板の他の部分に枠痕・木釘等は見られない。そのため、木目と考え(114)と同じく「枠なし四孔型」として使用されたと判断して良いであろう。

法古遺跡の他の田下駄、(69)(70)(116)(118)も同じ形態を想定するが、いずれも部分的なため詳細な復元は出来なかった。

また、(71)は枠組田下駄の横板であるため、上でみたような構造とは異なり方形の枠がつく田下駄、つまり代踏み等で使用される「大足」(秋山1993)であったと考えられる。

(72)の木製品は「足駄型」(奈良文化財研究所1993)の歯部である三角板を想定している。類例としては古墳時代の鳥取県池ノ内遺跡で出土例がある(米子市1986)が、法古遺跡例では組合部分のほぞ穴が認められない。

以上、法古遺跡からは幾つかのバリエーションがある田下駄が出土した。時期の特定が出来ないのが残念であるが、本遺跡出土の木製品のうち、器種の識別が可能なもの大半が田下駄によって占められている状況から、調査地の付近には古墳時代～古代にかけて水田等を営んだ場所が存在する可能性が極めて高い。

今後は水田などの生産域(沼状湿地の付近?)やその居住域(西側丘陵端部?)。又は『出雲国風土記』に記述のある「法古の坡」^{ほろふか} ^{つた}などを含めた周辺地帯の検討が必要となるであろう。

参考文献

- 赤沢秀則 1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会
秋山浩三 1993『大足の再検討』『考古学研究』40-3
内田映1983『法吉村誌』黒潮社
兼康保明1985『田下駄』『弥生文化の研究』5
(財)松江市教育文化振興事業団・松江市教育委員会 2001『田中谷遺跡(Ⅲ区)発掘調査報告書』
大川清・鈴木公雄・上野善通 1996『日本上器辞典』雄山閣
大谷晃二 1994『出雲地域の須恵器の編年と地域色』『鳥根考古学会誌』第11集

- 島根県教育委員会 1987 「島根県遺跡地図Ⅰ」
- 島根県教育委員会 2002 「田中谷遺跡・塚山古墳・下がり松遺跡・角谷古墳」
- 島根県八雲立つ風上記の丘資料館 1977 「弥生式土器集成」
- 宍道正午 1986 「島根県の縄文土器研究の諸問題」 『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
- 奈良国立文化財研究所 1985 「木器集成図録」 近畿古代篇
- 奈良国立文化財研究所 1993 「木器集成図録」 原始古代篇
- 萩原千鶴訳註 1999 「出雲国風土記」 講談社
- 松江市教育委員会 1991 「松江市遺跡地図Ⅱ」
- 柳浦俊 1980 「出雲地方における歴史時代須恵器の編年私論」 『松江考古』 第3号
- 柳浦俊 1986 「出雲地方の須恵器生産」 『山陰考古学の諸問題』
- 山本 清 1960 「山陰の須恵器」 『島根大学開学十周年記念論文集』 人文科学編 島根大学
- 米子市教育委員会 1986 「池ノ内遺跡（加茂川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）」
- 中川 寧 2000 「出雲平野における庄内式併行期の土器様相」 『庄内式土器研究』 X X II

最後に

本報告書の編・執筆者の一人である藤原は、平成14年度奈良文化財研究所の「木製品調査過程」研修に参加させて頂き、その折に教えられる所が大であった。研修には山中敏史先生を始め、以下の諸先生から貴重な講義を受けさせて頂いた。上原真人先生（京都大学）、飯塚武司先生（財）東京都生涯学習文化財団）、北浦弘人先生（鳥取県埋蔵文化財センター）、井上和人先生、豊島直博先生（奈文研）、樋上昇先生（財）愛知県教育サービスセンター）、扇崎由先生（岡山県教育委員会）、高妻洋成先生（奈文研）、河野通明先生（神奈川大学）、山口譲治先生（福岡市教育委員会）、山田昌久先生（東京国立大学）、橋本正博先生（小松市教育委員会）、光谷拓実先生（奈文研）、その他、奈文研の職員の方々は非常に暖かく迎えて頂き、研修生の皆さんにも楽しく接して頂きました。

秋山浩二氏（財）大阪府文化財センター）佐伯純也氏（財）米子市教育文化事業団）には田下駄に関して、澤田順弘先生（島根大学）には石材について、中村唯史氏（三瓶自然館）には地質に関して、有益な教示を頂き、中村亮二氏（財）富山県文化振興財団）には自然科学に関する玉璽を頂いた。ありがとうございます。

それら多くの学恩を受けておりながら、十分な検討が出来ないまま報告書の刊行となってしまい大変心苦しい限りです。今後、是非教示頂いた事柄を活かしていきたいと思っております。

付論 自然科学分析

1 法吉遺跡出土の種実遺体

中村 亮 仁

1. 試料と方法

法吉遺跡は鳥根県松江市法吉町に位置し、平成12年度の調査では縄文時代中～晩期を上限とする自然流路が検出されている。今回、分析対象となる試料は自然流路内などから取り上げられたもので、タッパーの中に水漬け状態であった。同定は肉眼及び双眼実体顕微鏡下で、主に現生標本との対比で行った。

2. 結果

同定結果を表1に示し、主要な分類群については写真に示した。同定されたのは木本のカヤ、イヌシデ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属A、コナラ属B、フジ属、センダン、トチノキ、ムクロジ、エゴノキの11分類群であった。分類群は同定レベルによって、属、亜属、種の分類階級で示している。種まで同定された分類群は木本のカヤ、イヌシデ、センダン、トチノキ、ムクロジ、エゴノキの6分類群であり、属・亜属まで同定されたのはコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属A・B、フジ属の5分類群であった。コナラ属アカガシ亜属はアカガシ、アラカシ、ウラジロガシ、シラカシ、イチイガシなど含まれており、コナラ属コナラ亜属はコナラ、ナラガシワ、ミズナラ、カシワ、ウバメガシなど複数の種が含まれている分類群である。コナラ属は花柱の形態からA・Bに分類し、Aは尖らずに柱頭に至るもので、Bは段を持って柱頭に至る分類群である。コナラ属にはアカガシ亜属とコナラ亜属が含まれており、アカガシ亜属とコナラ亜属は殻斗から容易に区別できるが、堅果のみでは困難である。

3. 所見

法吉遺跡の平成12年度調査ではコナラ属Bが最も多く、コナラ属A・アカガシ亜属もほとんどの試料から検出されている。カヤ・トチノキ・ムクロジ・エゴノキは少量ながら検出され、他にコナラ亜属・フジ属・センダンなども検出されている。アカガシ亜属は常緑広葉樹で、カヤも常緑樹である。このうちアカガシ亜属は照葉樹林の主要構成要素となり、カヤも構成要素となる。トチノキ・ムクロジ・エゴノキ・コナラ亜属・センダンは落葉広葉樹で、トチノキ・コナラ亜属はしばしば夏緑広葉樹林を形成する主要高木である。トチノキ・エゴノキはしばしば谷間などのやや湿った場所に多くみられ、フジ属はつる性植物で林内や林縁に生育する。

以上のことから推定される古植生は、堆積地の土流ないしは堆積地周辺からさほど離れていない場所には、アカガシ亜属を主要構成要素とする照葉樹林が広がっていたと推定され、林内にはカヤ・ム

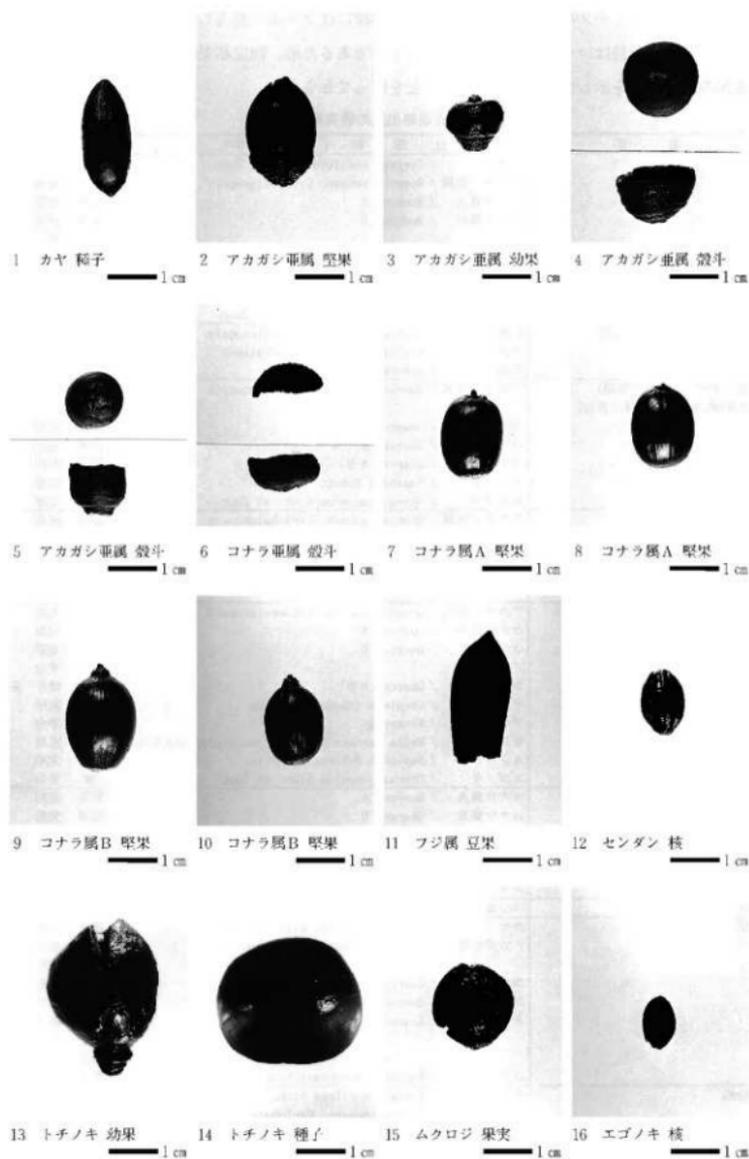
クロジ・コナラ亜属・センダンも散在的に生育していたと考えられる。また、自然流路周辺の比較的湿ったところにはトチノキ・エゴノキが生育し、林縁にはフジ属が繁茂していたと考えられる。

なお、今回の試料はいずれも選択的で偏ったものであるため、同定結果から導き出された占植生は原植生のごく一部を示しているに過ぎないことを断っておきたい。

表1 法吉遺跡出土の種実遺体一覧表

地区	分類群 (和名 / 学名)	部位	残存	個数
A区	カヤ / <i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	種子	完形	2
	アカガシ亜属 / <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	殼斗	完形	1
	コナラ属A / <i>Quercus</i> A	堅果	完形	2
	コナラ属B / <i>Quercus</i> B	堅果	完形	7
			半分	1
	コナラ属A-B / <i>Quercus</i> A-B	堅果	破片	5
	トチノキ / <i>Aesculus turbinata</i> Blume	種子	完形	2
			半分	2
	エゴノキ / <i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc.	核	完形	1
	B区 B-01 (自然木堆積) 細粒砂	アカガシ亜属 / <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	殼斗	完形
コナラ属 / <i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		殼斗	破片	1
不明 / unknown		葉	破片	多数
アカガシ亜属 / <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		幼果	完形	1
		殼斗	完形	2
B区 B-01 (自然木堆積) 黒色砂層 (有機質多量を含む)	コナラ属A / <i>Quercus</i> A	堅果	完形	1
	コナラ属B / <i>Quercus</i> B	堅果	完形	31
	コナラ属A-B / <i>Quercus</i> A-B	堅果	破片	3
	ムクロジ / <i>Sapindus Mukorossi</i> Gaertn.	果実	完形	1
	エゴノキ / <i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc.	核	完形	1
	アカガシ亜属 / <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	殼斗	破片	1
	コナラ属B / <i>Quercus</i> B	堅果	完形	18
			半分	9
F区	コナラ属A-B / <i>Quercus</i> A-B	堅果	半分	34
		破片	多数	
	アカガシ亜属 / <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	殼斗	完形	13
	コナラ属A / <i>Quercus</i> A	堅果	完形	6
	コナラ属B / <i>Quercus</i> B	堅果	完形	50
			半分	24
	コナラ属A-B / <i>Quercus</i> A-B	堅果	破片	多数
	イヌシデ / <i>Carpinus tshonoskii</i> Maxim.	果実	完形	1
	フジ属 / <i>Wisteria</i>	豆果	半分	2
	センダン / <i>Melia Azedarach</i> L. var. <i>Subtripinnata</i> Miquel	核	完形	2
ムクロジ / <i>Sapindus Mukorossi</i> Gaertn.	果実	完形	1	
エゴノキ / <i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc.	核	半分	1	
F区	コナラ属A / <i>Quercus</i> A	堅果	完形	1
	コナラ属B / <i>Quercus</i> B	堅果	完形	21
			半分	6
	コナラ属A-B / <i>Quercus</i> A-B	堅果	破片	20
	ムクロジ / <i>Sapindus Mukorossi</i> Gaertn.	果実	完形	1
C区灰色砂層	コナラ属A-B / <i>Quercus</i> A-B	堅果	破片	11
C区	フジ属 / <i>Wisteria</i>	豆果	完形	1
C区	カヤ / <i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	種子	完形	2
	アカガシ亜属 / <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	幼果	完形	1
		殼斗	完形	2
	コナラ属B / <i>Quercus</i> B	堅果	完形	8
	コナラ属A-B / <i>Quercus</i> A-B	堅果	破片	10
	トチノキ / <i>Aesculus turbinata</i> Blume	果実	破片	3
		種子	半分	1
		幼果	完形	2
	ムクロジ / <i>Sapindus Mukorossi</i> Gaertn.	果実	完形	1
	その他	カヤ / <i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	種子	完形
アカガシ亜属 / <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		幼果	完形	1
コナラ属B / <i>Quercus</i> B		堅果	完形	1
コナラ属A-B / <i>Quercus</i> A-B		堅果	破片	1

法吉遺跡出土の種実遺体



2 松江市、法吉遺跡における樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

2. 試料

試料は、沼状の湿地より自然木と共に出土した木製品14点、板材4点、杭5点の合計23点である。時期は古墳時代～9世紀を主体とするものである。

3. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作成し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本と対比することで行った。

4. 結果

結果を表2に、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科

図版1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁に著しい鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりアカマツに同定される。アカマツは、北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は硬質な良材で水湿によく耐え、広く用いられる。

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科

図版2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

る。樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高前後のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強韌で、広く用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

図版 3

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強韌、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築などに広く用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

図版 4

横断面：中型から大型の道管が、1～数列中で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列の放射組織と大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強韌、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科

図版 5

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、大きく膨れているものが存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅である。直立細胞には結晶を含み、大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は強韌で、耐朽性が強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

5. 所見

同定の結果、法吉遺跡より出土した木材は、アカマツ5点、スギ15点、ヒノキ1点、コナラ属アカガシ亜属1点、ヤブツバキ1点であった。なお、このうちの板材4点は全てスギであった。また、杭5点は全てアカマツであった。最も多いスギは温帯域に広く分布し、溼潤地を好む高木である。アカマツは岩肌などの露出した他の樹木の入り込めないところに生育する。コナラ属アカガシ亜属とヤブツバキは照葉樹林の主要構成要素で西南日本の暖温帯に分布する。

参考文献

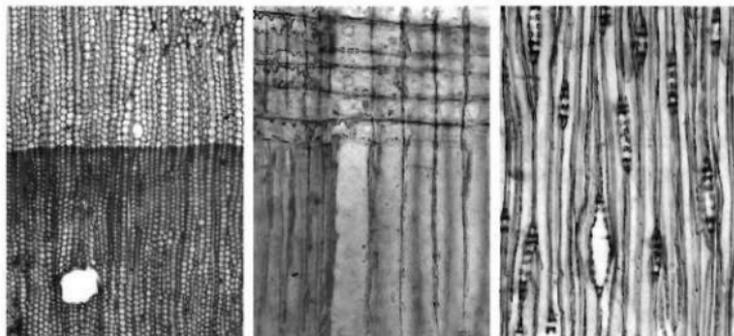
佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.

表2 法吉遺跡における樹種同定結果

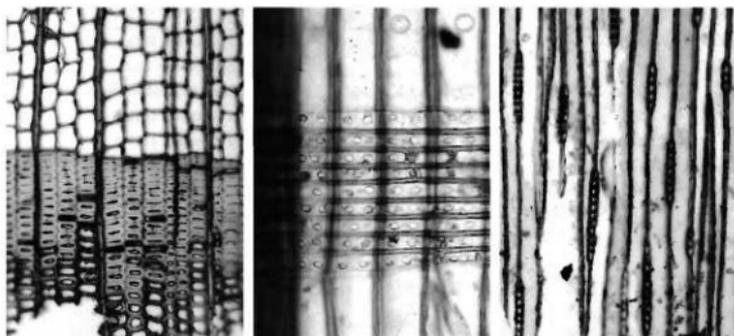
試料		結果 (和名/学名)	
No.61	木製品 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.62	木製品 ヒノキ		<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
No.67	木製品 コナラ属アカガシ亜属		<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
No.69	木製品 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.70	木製品 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.71	木製品 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.72	木製品 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.73	木製品 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.80	木製品 ヤブツバキ		<i>Camellia japonica</i> Linn.
No.81	杭 アカマツ		<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.
No.83	杭 アカマツ		<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.
No.84	杭 アカマツ		<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.
No.85	杭 アカマツ		<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.
No.86	杭 アカマツ		<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.
No.108	木製品 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.114	木製品 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.115	木製品 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.116	木製品 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.118	木製品 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.119	板材 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.120	板材 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.121	板材 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
No.122	板材 スギ		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don

法古遺跡の木材I



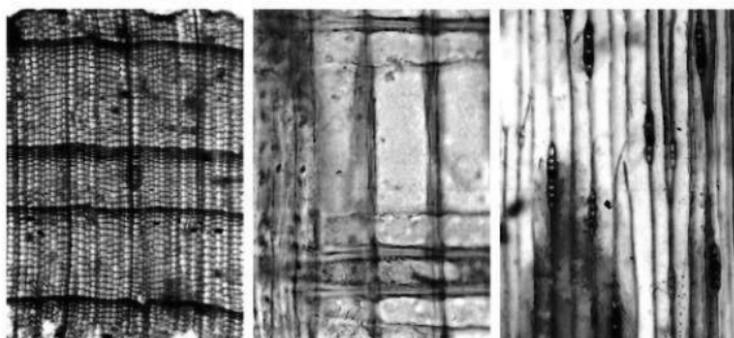
横断面 ————— :0.5mm 放射断面 ————— :0.1mm 接線断面 ————— :0.2mm

1. No81 杭 マツ属複雑管束亜属



横断面 ————— :0.2mm 放射断面 ————— :0.1mm 接線断面 ————— :0.2mm

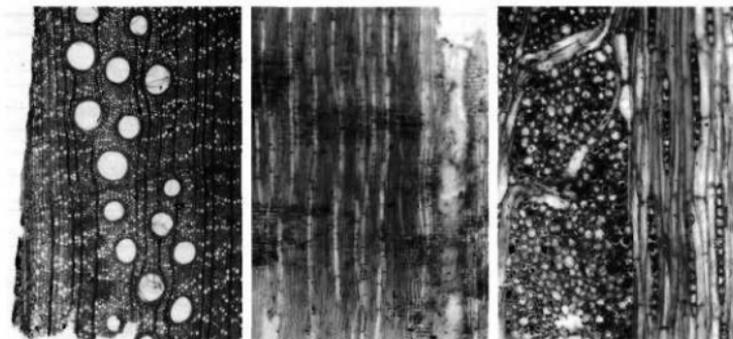
2. No122 板材 スギ



横断面 ————— :0.5mm 放射断面 ————— :0.05mm 接線断面 ————— :0.2mm

3. No62 木製品 ヒノキ

法吉遺跡の木材Ⅱ



横断面 ————— :0.5mm 放射断面 ————— :0.5mm 接線断面 ————— :0.2mm

4. No67 木製品 コナラ属アカシ亜属



横断面 ————— :0.5mm 放射断面 ————— :0.1mm 接線断面 ————— :0.2mm

5. No80 木製品 ヤブツバキ

表3 出土遺物観察表

番号	部位	種類	素材	法相 (cm)	跡上 (石部・木部は材質)	遺状	色調	調査	備考
1	A 砂層	石器	剥片	長さ4.8 幅1.4 厚さ1.1	黒曜石		黒	1.5/黒	
2	B 屈折十層 (16層)	縄文土器	鉢	直径11.4	0.5以下砂粒や中砂	良好	黒2.5/ 3/1黒地		ナデ、風化により不明
3	B 砂層	縄文土器	甕	径2.4 幅3.6	2.0mm以下の砂粒を含む	良好	黒2.5/ 3/1黒地		風化により不明
4	B 砂層	縄文土器	甕	径2.6 幅3.6	2.0mm以下石灰、黒石を含む	良好	外黒10/10 6/6灰地 内黒10/10 6/6灰地		外・灰質赤褐色 内ナデ
5	B 砂層	縄文土器	甕	径2.3 幅3.3 厚さ2.2	3.0mm以下石灰、砂粒を含む	良好	黒10/10 6/3/2灰地		風化により不明
6	D-01 (ドンリ遺構地点)	縄文土器	甕	径2.4 幅3.4 厚さ4.1	3.0mm以下砂粒を含む	良好	黒10/10 6/6/6灰地		外・2枚目赤褐色 内ナデ
7	C 西壁・灰色粘質土	石器	剥片	長さ4.3 幅2.3 厚さ1.4	黒曜石		黒	1.5/黒	
8	B 砂層	石器	剥片	長さ6.1 幅2.0 厚さ4.8	黒曜石		黒	1.5/黒	
9	B 砂層	石器	剥片	長さ3.9 幅3.9 厚さ0.9	黒曜石		黒	1.5/黒	
10	B 屈折十層 ～ 灰色粘土層	木製品	杖	長さ35.4 径4.9	心材材				5/9肉に削り
11	B 屈折十層 ～ 灰色粘土層	木製品	杖	長さ39.8 径3.1	心材材				1/9肉に削り
12	表上～10層土	土師器	甕	径18.0(推定) 高さ15.3	0.5～2.0mm石灰、金・黒炭粉、白・灰色砂粒を含む	良好	外黒10/10 7/4/2灰地 内黒10/10 8/2/3灰地		外ナデ 内ナデ
13	1及上～10層土	須恵器	甕	径18.0(推定) 高さ15.3	0.3～2.0mm石灰、金葉片、白・灰色砂粒を含む	良好	黒	1/4、6/灰	外ナデ、黒ナデ 外ナデ、黒ナデ
14	表上～10層土	須恵器	鉢	径11.0(14.0推定) 高さ7.8	0.5mm以下石灰、白色砂粒を含む	良好	外黒6/ 7/灰白 内黒10/10 7/2/灰白		外ナデナデ、黒地へナデ 内ナデナデ、黒地へナデナデ
15	1及上～10層土	須恵器	鉢	径11.0(14.0推定) 高さ7.8	砂粒少	良好	黒10/10 6/1/灰		黒ナデ
16	1及上～10層土	須恵器	鉢	径11.0(14.0推定) 高さ7.8	0.5mm以下石灰、金葉片少	良好	黒	7/灰白	外ナデナデ、黒地赤褐色 内ナデナデ、黒地赤褐色 内ナデナデ、黒地赤褐色
17	表上～10層土	須恵器	鉢	径11.0(14.0推定) 高さ7.8	0.3～2.0mm石灰、金葉片、白色砂粒を含む	良好	黒	6/灰	
18	表上～10層土	鉄器	ナリ鉢	径11.0(推定) 高さ10.3 幅5.4	金葉片、白色砂粒少	良好	外黒2.3/ 3/1灰 内黒2.3/ 3/1灰		
19	表上～10層土	鉄器	鉄片	長さ10.3 幅1.1 厚さ0.4			黒	5/18	
20	第1面調査	陶器	青磁	径13.0(推定) 高さ13.6(推定)	乳白色砂粒多	良好	黒10/10 6/灰白		
21	1及上～10層土	土師器	甕	径13.0(推定) 高さ13.6(推定)	0.5～2.0mm石灰、金・黒炭粉、白・灰・赤色砂粒多	良好	外黒10/10 6/3/2灰地		外ナデ
22	第1面調査	須恵器	甕	径13.6(推定) 高さ14.2	1.0mm前後石灰、砂粒少	良好	黒	4/灰	外ナデナデ、黒地 内ナデナデ、黒地
23	第1面調査	須恵器	鉢	径11.0(11.0推定) 高さ7.8	0.5mm以下石灰、白色砂粒少	良好	黒	4/灰	外ナデナデ、黒地 内ナデナデ、黒地
24	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	土師器	甕	径18.0(推定) 高さ15.3	0.5～2.0mm石灰、金葉片、白・灰色砂粒を含む	良好	黒2.5/ 3/1/3灰		黒ナデ
25	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	土師器	甕	径13.0(推定) 高さ13.6	0.3～2.0mm石灰、金葉片、白・灰色砂粒を含む	良好	黒	2.5/ 7/3灰	黒ナデ
26	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	土師器	甕	径12.8(推定) 高さ13.6	1.0mm以下石灰、金葉片、白色砂粒少	良好	黒	2.5/ 7/3灰	外ナデナデ、黒地へナデ 内ナデナデ、黒地へナデ
27	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	土師器	甕	径11.0(11.0推定) 高さ7.8	0.5～1.0mm石灰、金・黒炭粉、白色砂粒を含む	良好	外黒10/10 6/3/2灰地 内黒10/10 6/3/2灰地		外ナデナデ、黒地へナデ 内ナデナデ、黒地へナデ
28	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	土師器	甕	径13.0(推定) 高さ13.6	0.5～2.0mm石灰、金葉片、白色砂粒少	良好	黒	2.5/ 6/3/2灰	外ナデナデ、黒地へナデ 内ナデナデ、黒地へナデ
29	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	土師器	鉢	径17.4	0.5mm以下石灰、金・黒炭粉を含む	良好	黒	2.5/ 7/2灰	黒ナデ
30	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	土師器	甕	径18.0(推定) 高さ15.3	0.5～2.0mm石灰、金・黒炭粉、白・灰色砂粒多	良好	黒	2.5/ 7/4灰	外ナデ、黒地へナデ 内ナデナデ、黒地へナデ
31	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	土師器	甕	径14.4	1.0mm以下石灰、金葉片、白色砂粒少	良好	黒	2.5/ 6/3灰	外ナデナデ、黒地 内ナデナデ、黒地
32	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	土師器	甕	径12.8	1.0mm以下石灰、金・黒炭粉を含む	良好	外黒10/10 6/3/2灰地 内黒10/10 6/3/2灰地		外ナデナデ、黒地 内ナデナデ、黒地
33	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	土師器	甕	径13.6	1.0mm以下石灰、金葉片、白・灰色砂粒多	良好	黒	2.5/ 7/4灰	外ナデナデ、黒地 内ナデナデ、黒地
34	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	土師器	甕	径11.8	2.0mm以下石灰、金葉片、白色砂粒多	良好	黒	2.5/ 6/4/2灰	黒地赤褐色、ナデ、ハゲ目
35	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	須恵器	甕	径15.6	0.5mm以下石灰、白色砂粒少	良好	黒	6/灰	外ナデナデ、黒地へナデ 内ナデナデ、黒地へナデ
36	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	須恵器	鉢	径15.2(推定) 高さ11.6	0.5mm以下白色砂粒少	良好	黒	2.5/ 5/2灰	外ナデ
37	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	須恵器	小須恵	径19.4(推定) 高さ13.9	1.0mm以下石灰、白色砂粒少	良好	黒10/10 6/1/1灰		外ナデナデ 内ナデナデ、工具痕、鉄削痕
38	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	須恵器	甕	径15.8 高さ15.8	1.0mm以下石灰、金葉片、白色砂粒を含む	良好	外黒10/10 5/灰 内黒10/10 6/灰		外ナデナデ、黒地赤褐色、黒地赤褐色、黒地赤褐色
39	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	須恵器	甕	径19.7	0.3mm以下石灰、黒炭粉、白色砂粒少	良好	黒	5/灰	黒ナデ、ナデ
40	1～2面調査・下層 (赤褐色シルト)	須恵器	高杯	径12.7	1.0mm以下石灰、金葉片、白色砂粒を含む	良好	黒	5/7 1/灰白	外ナデナデ、ナデ 内ナデナデ、黒地赤褐色
41	1～2面調査・下層 (赤褐色シルト)	須恵器	高杯	径13.0(推定) 高さ13.1	1.0mm以下白色砂粒少	良好	黒	6/灰	外ナデナデ、黒地赤褐色 内ナデナデ、黒地赤褐色
42	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	須恵器	鉢	径14.0(推定) 高さ10.4	0.5～1.0mm白色砂粒を含む	良好	黒	5/1 1/1ナリ灰	黒ナデ
43	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	須恵器	甕	径15.0(推定) 高さ13.3	0.5～2.5mm白色砂粒を含む	良好	黒	10/10 6/2/3灰	黒ナデ
44	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	須恵器	甕	径15.8(推定) 高さ15.4	1.0mm以下石灰、白・灰色砂粒少	良好	外黒10/10 3/1ナリ灰 内黒10/10 2/11/1灰		黒ナデ
45	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	須恵器	甕	径15.2(推定) 高さ13.2	砂粒少	良好	黒	7/灰白	黒ナデ
46	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	須恵器	甕	径14.1(推定) 高さ12.0	1.0mm以下砂粒少	良好	黒	6/灰	黒ナデ
47	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	須恵器	鉢	径12.0 高さ12.0	0.5～2.0mm白色砂粒を含む	良好	黒	5/灰	黒ナデ、ナデ
48	1～2面調査・上層 (灰質粘土層)	須恵器	甕	径13.4 高さ13.1	1.0mm以下石灰、白色砂粒少	良好	黒	10/10 6/1/1灰	黒ナデ、ナデ
49	1～2面調査・下層 (赤褐色シルト)	須恵器	鉢	径16.8(推定) 高さ13.2	1.0mm以下石灰、白色砂粒少	不良	外黒10/10 3/2/1灰 内黒10/10 2.5/1 5/1灰		外ナデナデ、黒地へナデ 内ナデナデ、黒地へナデ

番号	施設	層位	種類	部種	法量 (m)	土上(石器・木器は材質)	構成	色	備	備考
50	1	1-2 遺構(灰黒シルト-土層)	灰土層	坪	長さ13.2(覆土厚)13.2	1.0m以下石英、白色砂粒少含	良好	Hae2.5Y 5/1灰白 内)Hae3 6/1灰	外)横ナデ、赤ナデ 内)横ナデ、ナデ	
51	1	1-2 遺構(土層 灰黒シルト-赤褐色シルト)	灰土層	坪	長さ10.6 厚さ14.5	0.5m以下石英、金雲母、白色砂粒少含	良好	Hae2.5Y 5/1灰白 内)Hae10Y 4/1黄灰	横ナデ、ナデ	
52	1	1-2 遺構(土層 灰黒シルト-赤褐色シルト)	灰土層	坪	長さ10.6(覆土厚)12.3	1.0m以下石英、金雲母、白色砂粒少含	良好	Hae2.5Y 4/1黄灰	横ナデ、ナデ	
53	1	1-2 遺構(土層 灰黒シルト-赤褐色シルト)	灰土層	坪	長さ10.8(覆土厚)12.6	1.0m以下石英、金雲母、白色砂粒少含	良好	Hae2.5Y 7/1灰白	ナデ	
54	1	1-2 遺構(土層 灰黒シルト-赤褐色シルト)	灰土層	坪	長さ12.6 厚さ15.9	1.0m以下石英、白・灰色砂粒少含	良好	Hae2.5Y 4/2灰褐	横ナデ、赤褐色 内)横ナデ、不定方向の乱しナデ	粘土あり
55	1	1-2 遺構(土層 灰黒シルト-赤褐色シルト)	灰土層	坪	長さ19.4 厚さ15.9	1.0m以下石英、白色砂粒少含	良好	Hae2.5Y 5/1黄灰	横ナデ、赤褐色 内)横ナデ、赤褐色	粘土あり
56	1	1-2 遺構(土層 灰黒シルト-赤褐色シルト)	灰土層	坪	長さ17.2 厚さ17.2	0.5~1.0m白・灰色砂粒含む	良好	外)Hae5Y 3/1灰 内)Hae3 5/1灰	横ナデ、赤褐色 内)横ナデ、赤褐色	粘土あり
57	1	1-2 遺構(土層 灰黒シルト-赤褐色シルト)	灰土層	坪	長さ17.8 厚さ17.7	0.5m以下石英、金雲母、白色砂粒少含	良好	Hae5Y 7/1灰白	横ナデ、赤褐色 内)横ナデ、不定方向の乱しナデ	粘土あり
58	1	1-2 遺構(土層 灰黒シルト-赤褐色シルト)	石層	石垣?	長さ18.5 幅7.4 厚さ12.4	横紋アライト質正絹石 (長径五割三祀、鼻稜稜面に多く突出)		Hae10YR 8/2灰白	斜長稜閃輝石の使用面	
59	1	1-2 遺構(土層 灰黒有機質層上)	石層	石碑	長さ19.2 幅7.6 厚さ15.2	横紋岩 (長径五割三祀、または中新世)		Hae5Y 8/2灰白	上下両面に加工面	
60	1	1-2 遺構(土層 灰黒シルト-赤褐色シルト)	石層	打製石剣	長さ16.0 幅9.1 厚さ12.2	横紋岩		Hae2.5Y 7/1灰白	全面に加工し刃部を作る 面)横ナデ	
61	1	1-2 遺構(土層 赤褐色シルト)	木製品	曲物容器	長さ22.5 幅5.9 厚さ11.6	二方板 4平			加工面	
62	1	1-2 遺構(土層 赤褐色シルト-黒褐色シルト)	木製品	曲物容器	長さ22.9 幅7.8 厚さ16.9	一方板 ヒノキ			加工面、切り付けたような使用面	
63	1	1-2 遺構(土層 赤褐色シルト-黒褐色シルト)	木製品	曲物容器	長さ14.5 幅3.6 厚さ11.1	二方板			加工面	
64	1	1-2 遺構(土層 赤褐色シルト-黒褐色シルト)	木製品	曲物容器	長さ26.9 幅7.7 厚さ16.9	二方板			加工面、切り付けたような使用面	
65	1	1-2 遺構(土層 黒色有機質層上)	木製品	曲物容器	長さ11.2 幅12.7 厚さ10.4	紅杉			加工面	
66	1	1-2 遺構(土層 黒色有機質層上)	木製品	曲物容器	長さ13.2 幅12.9 厚さ11.0	二方板			加工面	
67	1	1-2 遺構(土層 黒色有機質層上)	木製品	曲物	長さ17.0 幅9.2 厚さ16.6	一方板 コナラ属アカガシ産葉			加工面、穿孔1個	
68	1	1-2 遺構(土層 赤褐色シルト-黒褐色シルト)	木製品	田下駄か 脚板	長さ28.7 幅5.9 厚さ11.3	紅杉			加工面、穿孔2個	
69	1	2面(黒色有機質層) 積層	木製品	田下駄	長さ28.2 幅7.4 厚さ12.5	ク スギ			加工面、穿孔2個	
70	1	2面(黒色有機質層) 積層	木製品	田下駄	長さ28.2 幅5.4 厚さ12.0	ク スギ			加工面、穿孔1個	
71	1	2面(黒色有機質層) 積層	木製品	田下駄	長さ41.6 幅10.2 厚さ11.8	二方板 スギ			加工面、穿孔1個	
72	1	2面(黒色有機質層) 積層	木製品	田下駄	長さ30.7 幅10.1 厚さ12.5	二方板 スギ			加工面、穿孔2個	
73	1	2面(黒色有機質層) 積層	木製品	田下駄	長さ33.1 幅11.1 厚さ12.4	二方板 スギ			加工面、穿孔2個	
74	1	2面(黒色有機質層) 積層	石器	刮片	長さ17.5 幅6.1 厚さ0.6	横紋頁岩		Hae6 5/暗灰		
75	1	2面(黒色有機質層) 積層	石器	刮片	長さ15.8 幅3.3 厚さ1.1	黒燐岩		Hae6 1.5/黒		
76	J	1 土師器 横紋赤シルト 1-014 土師器 横紋赤シルト	土師器	壺	口径28.6(覆土厚)27.3 高さ16.0(覆土厚)15.8	1.0~1.5m石炭、金・黒炭、白・灰・褐色砂粒含む	良好	Hae2.5Y 7/3黄灰	外)横ナデ、縦・横・斜めハダヨ 内)横ナデ、ナデ、ハダヨ	
77	J	1-014 土師器 横紋赤シルト	土師器	高坪	長さ16.9 幅3.8 厚さ11.8	1.0m以下白色砂粒少含	良好	Hae6 7/灰白	横ナデ	
78	J	1-014 土師器 横紋赤シルト	瓦	瓦	長さ11.9 幅6.5 厚さ12.4		良好	Hae2.5Y 6/1黄灰	ナデ	
79	J	1 土師器 横紋赤シルト	石器	打製石剣	長さ11.9 幅6.5 厚さ12.4	横紋岩		Hae2.5Y 7/1灰白	2/3以上刃部を作る	
80	J	1 土師器 横紋赤シルト	木製品	小櫃	長さ11.9 幅7.1 厚さ7.3	心材杉 ヤブヅバキ			全面的に加工面	
81	J	J-02	木製品	杖	長さ18.9 幅5.7	心材杉 アカマツ			4方向に削り	継ぎあり
82	J	J-01	木製品	杖	長さ18.9 幅5.7	心材杉 アカマツ			1方向に削り	
83	J	J-01	木製品	杖	長さ19.3 幅7.9	アカマツ			4方向に削り	
84	J	J-01	木製品	杖	長さ16.3 幅6.9	アカマツ			4方向に削り	継ぎあり
85	J	J-01	木製品	杖	長さ17.1 幅6.1	アカマツ			4方向に削り	
86	J	J-01	木製品	杖	長さ14.4 幅4.3	アカマツ			3方向に削り	
87	J	J-01	木製品	杖	長さ14.3 幅4.3	アカマツ			3方向に削り	
88	J	J-01	木製品	杖	長さ16.0 幅3.6				1方向に削り	継ぎあり
89	J	1-2 遺構(土層 灰黒シルト)	養生土層	無磨面	11層不明 厚さ11.4(測定)	0.5m以下石英、金雲母、白・灰色砂粒含む	良好	Hae10YR 7/2(1)灰黄緑	外)横ナデ、横・縦・斜めハダヨ 内)横ナデ、目ハダヨ	
90	J	1-2 遺構(土層 灰黒シルト)	養生土層	無磨面	11層不明 厚さ12.1(測定)	1.5m以下石英、金雲母、白・灰色砂粒含む	良好	Hae10YR 6/4(1)黄緑	外)横ナデ、横・縦・斜めハダヨ 内)横ナデ	

PLATE

图 版

A区全景（南から）



B区全景（南から）



B-01自然木堆積
（南から）





C区全景（北から）



F区全景（南から）



F-01 ドングリ集中地点

G区全景 (南から)



H-1区全景
(南から)



H-2区全景
(北から)





I 区第1面全景
(北から)



I 区第2面全景
(南から)



I 区第2面検出状況
(東から)



I区木製品 (71)
出土状況



I区木製品 (69)
出土状況



J区第1面全景
(北から)



J-01、02杭列検出
状況



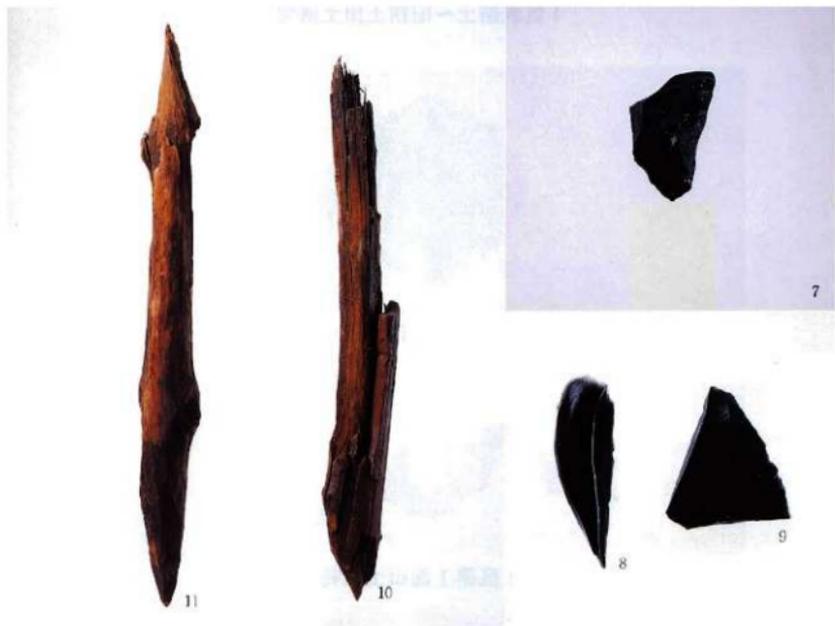
J区木製品（114、
116）出土状況



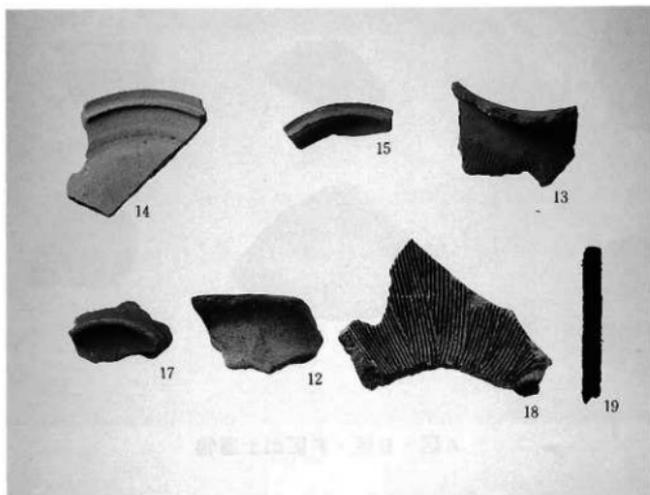
J区第2面検出状況
（北から）



A区·B区·F区出土遗物



G区·H区出土遗物



I 区表盛土~旧耕土出土遗物



同上・墨書土器



I 区第1面出土遗物



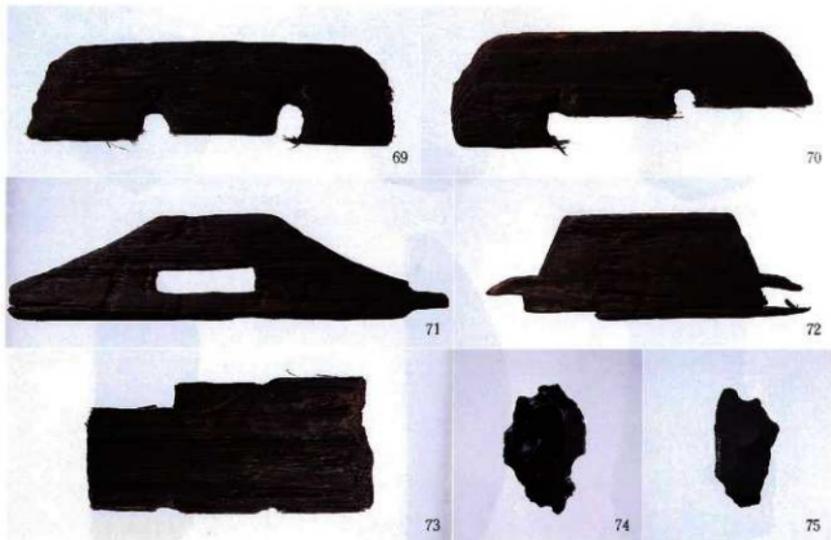
I 区包含層 (1 ~ 2 面間) 出土遺物 1



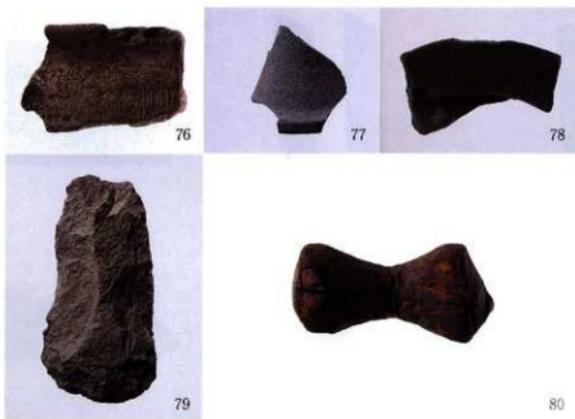
I区包含層（1～2面間）出土遺物2



I 区包含層（1～2 面間）出土遺物 3



I区2面出土遗物



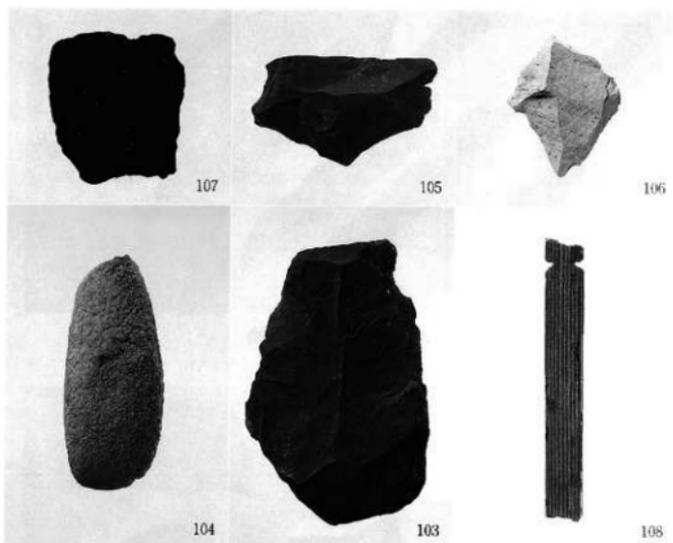
J区表盛土~1面出土遗物



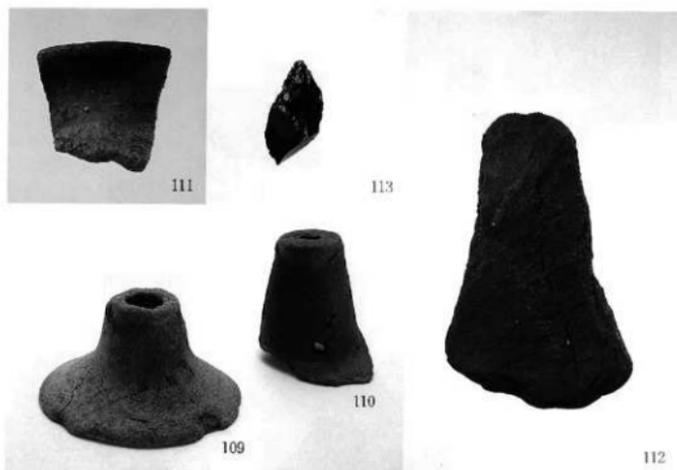
J-01、02出土遺物



J区包含層（1～2面間）出土遺物 1



J区包含層（1～2面間）出土遺物 2



J区 2面出土遺物 1



114



114



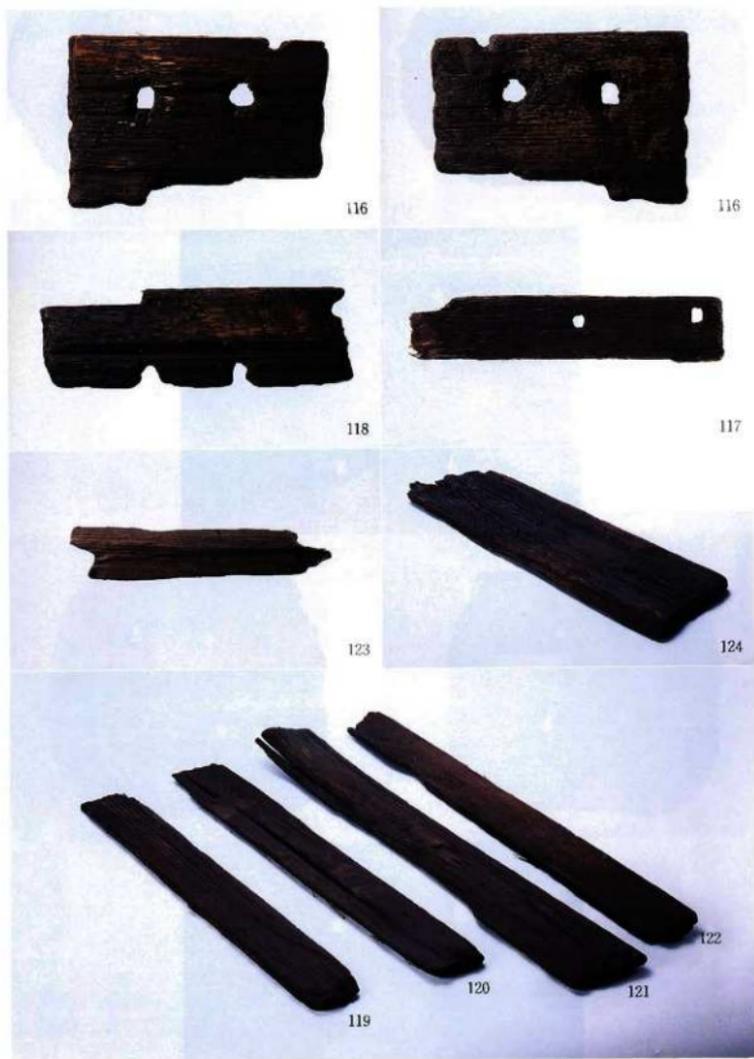
115



115



J 区 2 面出土遗物 2



J区2面出土遺物3

報告書抄録

ふりがな	しどうかすがひがしくませんどうろかいりょうじぎょうにともなう ほっきいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	市道春日東生馬線道路改良事業に伴う法吉遺跡発掘調査報告書							
巻次	松江市文化財調査報告書第94集							
編著者名	藤原 哲・秦 愛子							
編集機関	財団法人松江市教育文化振興事業団							
所在地	松江市母衣180-21							
電話番号	0852-28-2065 fax 0852-28-2038							
アドレス	maibun@web-sanin.co.jp							
発行年月日	2003年3月17日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
法吉遺跡	松江市 法吉町 春日町	32201	K-001	34° 29' 04"	133° 02' 33"	20001107 ～ 20010331	1318㎡	市道春日東 生馬線道路 改良事業
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
法吉遺跡	散布地	縄文・古墳～ 古代		沼状湿地、杭列		縄文土器・土師器 須恵器・石器・木器		

表紙写真 J区第2面 (検出状況)
J区木製品 (114、116) 出土状況
裏表紙写真 II区木製品 (72) 出土状況

松江市文化財調査報告書第94集

市道春日東生馬線道路改良事業に伴う
法吉遺跡発掘調査報告書

2003年3月

発行 松江市教育委員会
(財団法人)松江市教育文化振興事業団
印刷 (有)黒潮社